
増殖探偵・丸斗恵

腹筋崩壊参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

増殖探偵・丸斗恵

【Nコード】

N0202Z

【作者名】

腹筋崩壊参謀

【あらすじ】

分身能力を持つボーイッシュな女性局長と、無敵の力を有するガールッシュな男性助手。依頼も推理もないけれど、悪党妖怪未来人。どんな強敵も一網打尽。過去も未来もぶっ飛ばすこの二人を中心に、物語を進めていこうと思います。この作品は別サイト及びpixivにて投稿したものに加筆修正を加えたものとなっております。

01・よつこそ、丸斗探偵局へ

日本のとある街。一人の貴婦人が、途方に暮れていた。

街は今、お祭り真つ盛り。人通りも激しい中、弱弱しい彼女の声は、より賑やかな街の喧噪のなかに消えていく。このままでは、孫どころか自分すら行方が分からなくなりそうだ。そんな事すら思い始めた時、彼女の目にある看板が止まった。

「丸斗…探偵局？」

「はあ…退屈…」

少し古びたビルの一室で、一人の女性が暇を持て余していた。

彼女の名前は「丸斗恵^{まると・めぐみ}」。丸斗探偵局の代表、局長の座に就く女性である。

「それだけ平和な証拠ですよ、局長」

独り言のような彼女の言葉に応える燕尾服の男は、助手の「デューク・マルト」でゅーく・まると」。恵を支える、頼もしい人材である。

ここ「丸斗探偵局」は、局長と助手、二人だけで切り盛りする小規模な探偵事務所である。それゆえ、大事件など持ちこまれることは滅多にない。というか想定していない。…という事で、一日の大半は、事務所内で暇を持て余すというのが日課となっている。

「そんなこと言ってもねえ…仕事なきや生活できないわよ…」

客との相談用に設けてある机にだらしなく持たれかける恵。乱れたセミシヨートの紫髪もさることながら、今の局長のスタイルは警戒心がなさすぎる。露出を嫌うはずなのだが、今の彼女は自分の胸の谷間が服から覗いているを心配する事すら頭になかったようだ。とにかくくだらけていたい、という局長を見て、助手のデュークは呆れ顔で眺めている。腰に届くまで伸びた髪をかき上げるか、黒ぶちの眼鏡を少しだけ持ち上げるか。どちらかをしているという事は、今の状態に少しだけ不満はあるものの、悪くないという現す癖であることを彼は承知していた。

この光景、この探偵局では日常光景である。怠け癖のある恵がだらけ、デュークが突っ込みを入れるという日々を過ごしているのだ。それでもデュークが見限らないのは、彼女と共に働く今の状況を誇りに思っているからである。そしてもう一つ、彼女の「能力」を、自らの「力」で支え続けるために。

と、突然呼び鈴の音がした。慌てて服や髪を整える恵。てんやわんやの彼女は、ネクタイを整えるだけでどんな事態にも対処できる。黒のスーツを着こなすデュークの心構えとは対照的だ。助手が応対し、音の主を探偵局へと誘導する。依頼人が来たのだ。

「ようこそ、丸斗探偵局へ」

今日の依頼人はどこかの貴婦人。どうやら一緒に来た孫が街で行方不明になったらしい。

「そういえば、今日はちょっとした祭りがあるようですね」

「見失った場所は覚えていますか？」

「それが…分からないのです…」

申し訳なさそうな顔の貴婦人。交差点近くで気付いた時、既に孫はいなかったという。

「本当にすいません、何も分からないのにいきなりお邪魔してしまつて…」

「いえ、十分情報は得ました」

「…え？だ、大丈夫なのですか…？」

自信満々の局長。心配そうな貴婦人へ、優しく語り掛ける助手。

「僕たちにお任せ下さい。あなたの依頼、100%解決させます」

探偵局を出た恵は、おもむろに近くの物陰に隠れる。周りに誰もいないことを確認した彼女。恵を見ているのは、頭上に光る太陽だけである。空からの光が、彼女の影を映し出した次の瞬間、それに変化が生じた。まったく同じ形の影が、恵の周りにいくつも現れ始めたのだ。そして、その影を作りだした恵自身も、何人、十数人、何十人と、数を増していく。

これが、増殖探偵「丸斗恵」の力、分身能力である。能力を駆使し、様々な依頼を解決する。これが、丸斗探偵局流の調査方法である。…依頼はあまり来ないが。今回は、恵自身の数をたくさん増やし、風潰しに孫の行方を捜すという作戦だ。

物陰に隠れた人影が数十にも増えた辺りで、恵たちは作戦を実行した。後から後から、まったく同じ女性が次々に現れる光景は、どこことなく異様だ。

そこから「彼女」は自分同士と出会わないように注意しながら、あちこちを探した。交差点近くのコンビニや店、裏道、書店…ちよつくら書店やコンビニで立ち読みをしつつも、各地を捜す恵。しかしなかなか見つからない。疲れの色が見え始めた恵たちの脳裏に、

「誘拐」の二文字が浮かぶ。

その時、恵の一人から発見の合図が。貴婦人が見失った近くの道ではぐれ、路地裏で泣いていたようだ。

私たちの苦勞(?)は一体…と想いながらも発見に安心する恵たち。子供の近くにいる一人を残し、まるで煙のように消えていった。その様子を記憶するものは誰もいない。

探偵局。大好きなおばあちゃんと無事再会でき、大喜びの孫。肩の荷が降りた恵とデュークの前に、貴婦人はお礼を差し出した。なんと、それは封筒を厚くするほどの…

(げ、現金!? たくさんのマネー!? お金!?)
目を輝かせる局長と…

(…局長、相変わらずがめつすぎます…)
それに気付いた助手。

そして結果は、現金相当の商品券であった。いつもクレジットを使う貴婦人。ところが今日はお祭りという事もあり、手持ちがこれだけしかなかったようだ。

「ごめんなさい、局長さん。本当ならお金で支払う所なのですが…」
「いいんですよ、無事見つかった事だし。お孫さんの笑顔が今回の依頼料代わりですよ!」

…と爽やかな事を言う局長であったが、勿論本心は惜しむ気持ちがあつたようだ。

(これなら後払いにしてもらうべきだったな…)

依頼人と孫が立ち去った後の探偵局。

「それにしてもこの封筒、どれくらいの商品券が入ってるんだろ…」
「結構入ってる…って局長、早く貸して下さい! 金庫にしまいますよ」

「何するのよデューク! せっかく数えてあげようと思ったのに…」

「絶対無駄な事に使おうとしてましたよね今…」
デュークの心配もごもつともである。恵にお金や金品が回ると、毎回無駄遣いに消えてしまうのだ。毎回報酬をもらつたたびにそんな事をされてはたまらない。

「そつちがその手なら…私も黙つてないわよ！」

宣戦布告をかけると同時に、何人にも増える局長。

「私によこしなさい、デューク！」

「そうはいかないですよ、局長！」

慣れた感じで軽やかにすり抜ける助手。

「……助手、助手なら待つのが常識でしょ！」「……」

「僕は待ちません！そしてそんな常識はありません！」

今日も賑やかに、丸斗探偵局の『二人』の時は過ぎる…

02・銭湯態勢、デューク・マルト

日本のある町にある探偵事務所「丸斗探偵局」。だが、規模が小さいためか依頼はあまり来ない。という事で、本日も暇なうな状態である。そんな中、局長の恵は、深刻な悩みに直面していた。

「家の風呂が壊れた…」

朝風呂をしていたら、お湯が出なくなってしまったのだ。

「風呂がないと体も洗えない、リラックスも出来ない…」

「局長、そこまで悩むのでしたら僕が…」

「ちよつと黙ってて！ …修理するのも時間かかるし、風呂の予備があればなあ…そうか！」

「どうしましたか？」

彼女は「銭湯」という選択肢を忘れていたのに気付いた。探偵局を開いた当時からお世話になっている場所があるのだ。

「局長、「せんとう」って確か公衆浴場の事ですよ…？」

「そういえばデュークは初めてだったよね？それならなおさら行かないとダメみたい！」

どうせもう夕暮れだし、依頼も無さそうなので探偵局を早めに切り上げることにした恵。心配なデュークを連れ、いざ戦闘…いや、銭湯へ向かう事に。

「おばちゃん、恵です〜！お久しぶりー！」

「あら恵ちゃん。かっこいい男の人まで連れてきて、とうとう春がきたのかな？」

「ち、違つわよ！彼は私の助手であつて、その…もつ、おばちゃん
の意地悪！」

「ふふふ…」

久しぶりに会う番頭のおばちゃんは、今日も元気そうだった。

…しかし、二人が着替え場へ向かう時に、おばちゃんがどこか不安
そうな顔つきだったのをデュークは見逃さない。

一方の局長は、一目散に服を脱ぎ捨て、タオルを体に巻いて風呂へ
直行。一日の疲れを癒す。とはいえ、今日は一日風呂の事を考えて
いただけだったのだが。

「ふう、久しぶりに入るといい気分ね… さすが天然の源泉の真上
に作つてるだけは…！」

…彼女は妙な視線を感じた。別の入浴客？ いや、それにしても変
な方向から感じる。念のため大声を出すと、謎の視線はどこかへ消
えた。

風呂からあがり、腰に手を当ててコーヒーマルクを飲む恵に、長い
髪を結ったデュークが初めての経験の感想を嬉しそうに言った。

「銭湯つて気持ちいいですね！なんか僕や局長の肌が綺麗になった
気がします」

「あら、いつも綺麗じゃないっていうのかしらデュークくん？ …

ところで、さっきお風呂で変な感じしなかった？」

「え？」

デュークに先程の視線の事を問いかけるが、彼の入った湯「男湯で
は特に何も感じなかったとのこと。ということは、考えられるのは
一つ。誰かが外部から女風呂を覗いている！？」

「ただ、その事を直接おばちゃんに言うのは…」

「言わなきゃならないけど、いづらいわよね…」
対処に悩む探偵と助手。

その時、番頭のおばちゃんが二人を呼んだ。相談したい事があるというのだ。

事情を聴く恵とデューク。

…やはり、先程の視線は「覗き」のようだ。最近、不審な動きをする男性を銭湯の周りでよく見かけるといふのだ。

「警察には相談したのですか？」

「ええ、一応相談はしてみたのよ…でも、確実な証拠がない限りは警察も動けないらしくて…」

「肝心な時に融通が利かないわね…これじゃあもつと覗かれないと解決させないって言ってるのと同じじゃない」

「局長、ちよつと落ち着いて下さい…。」

ところで、ちよつとお聞きしたい事があるのですが」

「どうしました？」

「この銭湯の場所に関してなのですが…」

「場所？」

この銭湯を見てデュークは考えていた事がある。いい具合に古びた銭湯の周りには新しいマンションや、新進企業の本社が目立つ。近くに一軒家もちらほら見かけるとはいえ、土地の買収の話もあるのではないか？

結果はまさにその通りであった。以前から土地の売買についての相談をよく持ちかけられるのだ。

「しつこそうね…じゃない、しつこそうですね…」

「ええ恵ちゃん…おっと失礼局長さん。私もここが大事だからいつもお断りしてるんですけど、何べんも来て…。お二人が来たつい

さつきもまた男の人が何人がやってきましてね…」

(もしかしたら…)

(もしかすると…)

二人の探偵の考えは一致した。「覗き」は企業連中による土地買収の脅しかもしれない。

という事で、悪を撃退するべく、デュークと共にこの話を引き受ける事に。

「ごほん、えー、ところで、今回の事件の解決に伴う報酬の話ですが…」

「うふふ、そういうと思って、これを用意しましたのよ、探偵さん。」

そう言って、おばちゃんがおもむろに出したのは…

「「銭湯の永久無料券!?!」」

そんなものを頂くとはもったいなさすぎると言おうとしたデュークを抑え、目を輝かせた恵は即答で依頼解決を約束した。

(局長…相変わらずですね…というか早く手を口から離してください…)

そして、夜の探偵事務所。今日は残業も兼ねて、この一件の作戦会議をすることにした。

「今回優先すべきは、まず覗き魔の撃退ですね」

「ただ、もし覗き魔が企業と関係していたら、たとえ追い払ってもしつこくくる可能性があるわね…」

「雇われ人ならなおさら。相手はどんな汚い手でも使う可能性がありますし…」

「うーん…」

一瞬の沈黙を止めたのは恵だった。

「…ねえデューク、『あれ』、使える？」

「逆に伺いますが、今まで聞かなかった意味は？」

「心配だったのよ、デュークが乗り気にならないかな…って」

「その心配は無用ですよ、局長。今回は一大事、思う存分使いますよ」

「そうこなくちゃ！」

恵の言う「あれ」とは、一体何だろうか…？

…数日後。常連さんも上がり、静かになった銭湯。そこに一人の女性が来た。

そしてその女性を確認したかのごとく、数名の男が銭湯の周りに集まり出す… 綺麗な黒髪、フォーマルな服装… 仕事帰りの美人は彼らにはうってつけの「撮影材料」だ。

…それを、数名の「同じ姿」の女性たちが追跡していたのに、彼らは気付かない。

男たちは、彼らしか知らない秘密のポイントへ向かった。覗きの被害に遭っている銭湯側も手をこまねいている訳ではない。女湯と男湯を日によって入れ換える事で対処している… ただし敵には動きを読まれているのだが…。

ターゲットが浴室へ入って来た。余りにも浮世離れたそのスタイルに、下心丸出しの男たちは釘付けだ。体を洗い、髪を整え、浴槽へ向かう女性。

と、突然女性は右腕を高々と上げ、そして浴槽へ響かばかりの大きな音を指で鳴らした。その瞬間、覗き魔が見たのは信じられない光景であった。先程まで美しい紫髪の女性が入っていた場所には、

裸の若い長髪の男性が悠々と立っているではないか！

これは一体どういう事なのか？彼らとしては眼をそむけたくなる光景だが、あまりにも突然の出来事に唾然として身動きが出来ない。その時。

「何をしているの？」

彼らの後ろに、腕組をして怒り心頭の女性の姿が！自分たちの行爲が見られていた事に気付き、慌てて逃げる覗き魔たち。しかし、女性は何故か追いかけない。追いかける必要なんてないからである…。

近くの道。追手をまいたと思っていた三人…だが。

「逃げるつもり？」

彼らの背後から聞こえた声に振り返ると、先程の女性が同じような格好をして立っているではないか！悲鳴一発、再び逃げ出す三人。追手を撒こうと三方向に逃げ出す三人。しかし、どの方向に逃げても先程の女性が待ち構えていた。

「どこに逃げても」

「貴方達に逃げ場所なんて」

「ないのよ！」

彼らは気付いた。自分たちを追いかけているのは一人ではない事に。そして、彼らは十字路に追い詰められた。周りには、腕組みをした大勢の女性…丸斗探偵局局長、丸斗恵が。

「……なんでもっと早くに気付かなかったのかしら？」

もはや身動きもできない覗き魔たち。取り囲む恵の一人が合図をすると、近くの家の屋根に一人の男が現れた。

「じゃ、よろしく」

「はい」

燕尾服を着こなした助手が指を鳴らした途端、電線が突然切れ、覗き魔の上に落ちてきた。

「……ひいひいひいひいっ！」「」

震え上がる三人の前で、電線がまるで生き物のように動き、三人を縛り上げる。気がつくと、電線は太い縄に変わっていた。さらに辺りを見ると、あたりの景色が一変していた。先程までいた十字路ではなく、暗い公園の中。しかも、周りにはたくさんの人影…勿論全員丸斗恵である。

「……さ、聞かせてもらおうじゃない？」「」「」「」「……どうして覗きなんかしたの？」「」「」「」

怯えつつ男たちは言った。どうやらあの銭湯、以前「覗きの名所」としてとある方面の雑誌に突然載ったようだ。それに目を付け、度々写真を撮ってはネットなどに流出させていたらしい。また、銭湯の買収を目論む企業たちとこの三名の間には、特に接点などは見当たらなかった。

ここまで追い詰めても反省せず、修理しない銭湯が悪い、と悪態を突く覗き魔たち。彼らを前に、恵の怒りが炸裂、自称美しい十数本の脚が、男たちの弱点に天罰を下した。

数日後…ようやく風呂が直った恵。しかし、久しぶりに入る銭湯の

気持ちよさが忘れられない。

「今日は私が銭湯担当だからね、あなたは家でゆっくり浸かってなさい」「何言ってるのよ、私が担当じゃなかったの？」「私よ！」「

いや私！」「

「局長、自分同士で喧嘩しないでくださいよ…」

…しばらくは、丸斗恵が同時に2人以上存在する時間が長くなりそう
うだ。

ドタバタが落ち着き、新聞を見る恵。表紙をめくり、中のページを読む途中、とある記事を見つけた。

銭湯で覗き魔が逮捕されたというのだ。しかも、「全国区の記事」の欄に。記事には、企業に頼まれた覗き屋が、銭湯の価値を下げようとしていたとあった。会社も釈明に追われ、土地買収どころではなさそうだ。

サムズアップでデュークの仕事を褒める恵。笑顔で返すデューク。過去や現在を自由に改変し、様々な事象を思いのままに操作する、「時空改変」と呼ばれる能力。これが、未来からやって来た助手デューク・マルトの得意技であり、担当する業務である。

03・血で血を増やす

基本的にこの小説は「今日も暇な丸斗探偵局」で始まりそうなほど、依頼はあまり来ないここ丸斗探偵局。そして暇そうな丸斗恵。しかし、今日に限ってはそう無かった。丸斗探偵局局长、丸斗恵が今いるのはどこかの廃ビル。口をガムテープで覆われ、体は縛られている。

(完全に油断してた…)

現在、彼女はとある暴力団に捕まっている。何故このようになったのか、説明しよう。

数日前、息子の帰りが遅い事を心配した母親からの依頼があった。それを受け、調査を続けていた恵たちは、次第にある可能性に行きついた。もしかしたら暴走族の一員になったのではないか…というものである。結果は全く関係のないものだったが、本題はここからである。

「やっぱり予想通りだったわね…」

「そのようですね…」

未だに消える事のない暴走族。どうやらその暴走族を金づるにしている暴力団がいるらしい。それに関して助手のデュークが調べたところ、本拠地が近くにある事が分かった。どうやらある大物の暴力団の下っ端が勝手に独立して作ったようで、まだ若い連中が多く、非常に乱暴な一団という内容まで判明。警察もじきに動くであろうという情報も耳に届いている。

「最近、ひったくりや盗難が多いのもこれがあるかもしれません」
「犯人も捕まってるじゃない、顔も分からない。もしかしたら…ね」

と、そんな時に恵はとんでもない事を言い出した。やはりここまでわかった以上、手柄は頂きたいものである。普通、このような事例ではデュークは猛反発を行う。自分たちはあくまで探偵、犯人を逮捕するのは警察の仕事。時空改変という力を持つものの、その力を知り尽くしているが故に、それを無駄に多用する事を避けている。ところが…。

「分かりました」

今回はデュークも大いに賛成した。何か理由はあるようだが、恵はそれについて聞く事は無かった。

早速時空改変の能力が発揮される。過去の世界を作り出す様々な法則や法律、書類、そしてそれに基づく人々の考え。それらの書き換えを行い、「行方不明者調査」の名目で暴力団本拠地近くまで行ける事になった。

そして当日の夜。…なぜ夜かというと、悪人をおびき寄せやすいからと、恵が寝坊したからである。

暴力団本拠地近くまで恵が一人で来た時、突然背後から男に襲われ、口に押しつけられたガーゼの催眠物質を吸ってしまった。そして今、彼女は捕まっている。

恵が探偵である事はとくにばれており、口封じも兼ねて裏商売のAV業者に売り渡そう、と暴力団の連中がその近く談笑していた。分身しようにも、このままだと紐に詰まってるくに体を動かせない。苦悶の表情を浮かべる女探偵。こんな事なら、自分だけではなくデュークも連れてくれば良かった。そう恵は思った…と書きそうだが

彼女はそうは考えていなかった。

突然廃ビルが慌ただしくなった。何者かが乱入してきたのだ。襲いかかる男を軽く退け、恵が閉じ込められていた部屋を見つけたのは…

「悪いけど、人質返してもらおうかしら？」

「丸斗恵」であった。

いざという時のため、もう一人自分を作っていたのだ。これが、彼女第一の奥の手である。

分身したとはいえ、全力疾走の男性をも追い抜く力を持つ恵にとっては、二人で息を合わせれば、硬い紐を引きちぎる事も不可能ではない。自分に礼を言い、ようやく自由が戻った。しかし、当然事態はそれでは終わらない。

「このまま逃げる気か？」

暴力団連中は押しかけて来たもう一人の恵を、双子の姉妹と解釈したようだ。言葉汚く罵る彼らだが、気の強い恵にはそうはいかない。全員まとめて始末してやると意気込む二人の局長。

そして、戦いは彼女の強烈な蹴りから始まった。顎に打ち込まれた衝撃で吹っ飛ぶ男。小娘を捕らえようとする彼らだが、動きやすいジーンズを身につけている二人の恵相手には少々不利な状況であった。女性という事で油断したからか、予想外の押されぎみの男たちの中で、焦った一人が行動を起こした。

「く、くっそおおお！」

次の瞬間、辺りに聞きなれない音が響いた。この国では、滅多に聞

く事が出来ない火薬の音、衝撃の跡。

紐から解かれたばかりの恵が、血まみれになって倒れていた。自分の横で倒れこむもう一人の自分を、もう一人の恵は静かに見つめていた。何を考えているか、動揺しながらも動き出した暴力団員は知らない。当然であろう、まさか次の瞬間あのような光景が起きてしまうのだから。

倒れていたはずの「死体」が、突然光になって消え、そして部屋中に飛んだ血しぶきが人型に膨らみ、次々に「丸斗恵」の姿に変わっているのだ！

「私が相手よ」「私も相手よ」「私もよ」「私も」「私も」「私も」
「私も」「私も」「私も」「私も」「私も」……

恐怖におののく暴力団員の一方、恵の数は次々に増え続けた。銃で撃ち抜いても、その分また増え、逆にこの建物を埋め尽くしていく。そしてついに、暴力団員たちは失神してしまった……。

後はこれを警察に送りこめば大丈夫……と思った恵。分身をいったん消す事にした。……だが。

「あ……あれ」「消えない!?!」「ちよつと、どうなってるのよ!?!」
「私も知らない!」「私も!」

消えない。それどころか血しぶきからの分身が文字通り「分裂」を始めてしまった。ちよつとガン細胞が無限に分裂し続けるのと同じように、本人でも止められなくなってしまっているのだ。

「ちよつと、もう入れないわよ……!」「」「そんな事言っても……」「」
「」「ちよ、もうやめて!」「」「」

しかし、恵の分裂は止まらない。もう部屋という部屋がぎゅう詰めである。このままだと、外に溢れて大変な事になってしまう。こうなつては、もう局長に残された道は一つ。

助けて…！

そして、窓ガラスすら割れかけるほどの缶詰め状態になった時、救世主は現れた。

「局長！大丈夫ですか！」

助手のデューク・マルトだ。手に持ってきたのは簡易型の医療用レーザー。すし詰め恵たちに当てると、次々に光となって消えた。たった数分で、ビルを埋め尽くしていた恵は元通り一人に戻った。

「危ない所でしたね、局長」

「そんなものまで用意して…準備は良いけど実行は遅かったわね、デューク」

「すみません、今後は気をつけます」

次の日。新聞には例の暴力団員が全員逮捕されたというニュースが。しかし、あくまで「警察」が全てを行ったかのように書いてある。局長の能力は見世物なんかじゃない。だから、歴史には残らせない。デュークの得意分野「時空改変」は、主にこのために使われるのだ。なぜあの時賛成したのかデュークに尋ねる恵。口を濁す「最高のアシスタント」の両頬に、お礼のキスをする二人の恵。顔を沸騰させつつ、デュークは最後に改変の仕上げを行った。過去の自分が「憧れの探偵」のピンチを救えるよう、過去に起きた事件に「情報提供者」として「丸斗恵」の名前を加える、という…。

(言えないよな…さすがにあんな事は)

04・そして彼らは出会った

話は少し昔に遡る。

路地裏でチンピラ3人が何かを囲み、殴ったり蹴ったりしている。何か言ったらどうなんだ、そういう彼らに対し、その対象は何も言えない状態となっていた。それは、一人の青年。執事と見間違う燕尾服も、彼らの乱暴のせいでボロボロとなり、長い髪も引きちぎられていた。

しかし、いくらあれだけ殴られ蹴られたのに、彼は笑みを浮かべていた。それに腹を立てたチンピラが、近くにあつた角材をぶつけようとする…。

「あんたたち、何してるの？」

手を止めたチンピラたちが見たのは、腕組みをした一人のスタイルの良い女性だった。

そして、彼女の姿を見て安心したのか、リンチされていた青年は意識を失った…

|||||

現在。

本日依頼の予約が来ている丸斗探偵局。しかし最近掃除をしていなかったので少々埃だらけである。真面目にはたきを用意する助手のデューク。一方局長の丸斗恵は、非常に面倒臭く感じていた。

「局長も手伝ってくださいよ…」

「えー…私も…？よし、じゃあ…この手で行こうか」「」

さっそく分身を作り、掃除を任せようとする彼女。しかし、根本が

嫌がっている以上、分身も掃除を嫌がるというのは当然の流れ。そしてその分身がまた分身を作る。その分身もまたまた分身を作り…。

「ちょっと入れないわよ…」「うぎゅう…そこ邪魔…」

広めの部屋のはずの丸斗探偵局が同一人物でぎゅう詰めになってしまった。これにはさすがのデュークも…

「いい加減にしてください!!」

「デュークのケチ…」「ケチで結構です」

助手に叱られたのを不服に思いつつ、分身同士で協力して掃除をする恵。

とはいえさすがは局長得意の人海戦術、あっという間に綺麗になった探偵局。

と、ちょうどいい所に依頼人がやってきた。瞬時に一人に戻った局長が出迎える。今回の依頼人は女性。そして、その依頼の内容は女性は勿論、男性にも非常に堪えるもの。

「ストーカーですか…」

「はい…」

まるで自分を追うように電話がかかったり、視線を感じたり、そのような事がずっと続いているらしい。人権を無視するストーカーに憤りを感じる恵の横で、なぜかデュークは依頼人の顔をまじまじと見つめていた。どうしたのかと聞く恵に、依頼人が「彼の知り合いによく似た顔をしていたためだと応える助手。惚れたのかとからかいつつも、しっかりと依頼人には謝る彼女であった。

「どうしますか、局長？」

「デュークの力では…」

「不安なところもありますね…」

依頼人が去った後、作戦会議が始まった。様々な事情があり、盗聴調査に関してはデュークの力を持ってしても丸斗探偵局の領域ではないため、探偵仲間の「調査のプロ」に連絡を入れ、改めて調査することになった。

そんな中、デュークは考えた。あの女性に良く似た顔を、確かに見たことがある。自分もよく知るものだ。しかし、それが何なのかまでは、この時点では思い出せなかったようだ。

それから数日後、探偵仲間と共に依頼人の自宅にお邪魔して調査した。盗聴調査のプロだけあって手際の良い調査が行われたものの、盗聴器は発見されなかった。しかし、今までの経緯を考えると犯人は何らかの形で彼女の動きを把握している事は確かである。そうすると、犯人は外から覗いたりしてるのだろうか。

悩む局長を、依頼人が呼びとめた。探偵局に相談へ言った後から、妙な事を経験したというのだ。例のストーカーは、彼女の行動を先読みしたような電話をしてくる事があるのだ。しかも、十中八九合っていると言うのだ。

それを聞いて、デュークは確信した。今回の犯人と、この女性との関係を。もしかしたら被害を抑えるどころか、犯人を退治できるかもしれない。調査を終えた後、探偵局へ戻ってその旨を局長である恵に報告した彼。暇になってしまった探偵仲間にも後で結果を報告することにし、改めて作戦を練り直す事にした。

再び数日後、住宅地。一人の女性：依頼人の女性が細い路地を歩いている。薄暗い街灯が、もう少しでたどり着く家までの道案内をしていた。夜の寂しさを醸し出す光景が続く。

と、その時。まさに不意打ちの如く背後に突然男が現れ、彼女に刃物を振りかざしてきた。素早くよける依頼人だが、鋭く光るナイフが右肩をかすめた瞬間、目の前から突然男の姿が消え、背後に現れた。そしてそのまま脳天を狙ってナイフを振りおろそうとする男を、依頼人は必死に食い止める。夜の道で続く揉み合い、それを終結させたのは…

「予想通りだったね」

丸斗探偵局助手、デューク・マルトの一声だった。

一瞬慌てる男だが、その顔を見るや否やすぐ体制を立て直し、女性を掴み首に刃物をあてた。彼女を人質にでもして見逃すつもりのもうだ。

一方のデュークも男と同様、相手側の顔を知っていた。

この男、デューク・マルトと同じ未来人。ギャングまがいの行為を行い、逮捕されたのだ。しかし、とある事情で脱獄に成功、同じく牢獄されていた仲間を見捨てて過去へ逃げのびた。今襲っている「依頼人」は、彼が逮捕されるきっかけを作った捜査官の遠い先祖。彼は自らの過去を思いのままに変えようとしているのだ。相変わらず卑怯な真似ばかり、と憎き犯罪者を蔑むデューク。しかし、男にも言い返す材料があった。

「どのツラ下げて俺を卑怯だとか言うんだあ、

大犯罪者さんよお？」

犯罪者、デューク・マルト。

タイムスリップの技術が発達した未来において、歴史を変えること、いわゆる時空改変は「8つ目の大罪」と呼ばれるほどの重罪になっ

ている。かつてのデュークも、「犯罪組織」の一員として何度も大かつ大規模な時空改変を起こし、時空警察に指名手配されているのだ。

ただ、彼のために言うと、今のデュークは決して犯罪者ではない。過去の世界で起きたある出来事がきっかけで、彼は真実を知り、犯罪から身を洗う事を決意。自らの償いの意味で過去へ跳んだ。その後の功績を知っている者も時空警察には多いようで、彼の扱いは現在「義賊」的なものとされている。

しかし、デュークの起こした犯罪歴は決して消える事は無い。生物種の絶滅、文明の崩壊、地殻変動…かつて起こした様々な犯罪を述べ、反応しないデュークを男はおもしろげに罵り続けた。

しかし、このとき男は完全に油断していた。

突然指を噛まれ、依頼人をつかむ腕の力が抜ける。

「なっ!?!」

その隙に逃げる依頼人。未来から来たこの男が得意とする「瞬間移動」で追いつこうとした…が、現れた途端、脳天に強烈なキックを食らわせられ、体制が崩れる。振り返った男が見たのは、もう一人の依頼人だった。

啞然とする彼。気づくと、デュークの姿は消え、代わりに道を覆い尽くす依頼人の大群に囲まれていた。いくら未来の技術が発達しても、瞬時に同一の人物が現れると言う事は決してあり得ない、それが彼の常識であった。だが、時として常識が役に立たない事がある。そういう状態に慣れておらず、恐怖で震える男の手から刃物が落ちた瞬間、無数の依頼人が、男のある「一点」へ集中攻撃を食らわせた。

…遠い未来でも、男の弱点は変わらないようだ。

気絶した殺人未遂犯を見下げている依頼人の一人がデュークの名前を呼ぶと、近くの家の屋根上が歪み、一人の男が姿を現した。そしてデュークが指を鳴らすと、道を埋め尽くす依頼人の姿が、増殖探偵・丸斗恵へと変わった。男の「瞬間移動」と同様、デュークにも能力：「時空改変」という凄まじい能力がある。森羅万象、ほぼあらゆるものを操り、作りだし、消し去る事が出来る。まさに「八番目の大罪」にふさわしい能力だ。今回はこれを使い、恵の姿を依頼人の姿に変え、自らも透明になれる能力を一定時間身に付けたのである。そして犯人をおびき寄せ、一気に退治する。今回の作戦、依頼と共に見事に成功、そして解決した。

翌日。依頼人に事件解決の知らせを届けた恵とデューク。依頼人の安心した笑みを見るのが、探偵業をやって一番幸せな時だ。料金は後で口座に振り込んでもらうことになり、未来史に名を残す凄腕捜査官の遠い先祖は去って行った。

それから少し経ち、落ち着いてきた頃にデュークが局長に尋ねた。あの犯人の男が言ったことである。あの後、犯人はこれまたデュークの時空改変で「下着泥棒」に仕立て上げられた。今頃警察のお世話になっているころだろう。その男が言った。

「僕は大犯罪者、過去へ逃げた臆病者、そして卑怯者……」

心配顔を隠せぬまま彼は恵に改めて問う。こんな自分でも、助手として雇ってくれるのか、と。

それに対する局長の答えは、いつものような明るい声だった。

「いまさら何を心配してるの？」

大事な右腕、大事な助手、それがデューク・マルト。例えどんな苦しい過去を持っていようと、今の彼を信頼しない局長なんて、この世界にいるわけがない、と恵は力強く言った。

その言葉に、とびきりの笑顔で返すデューク。その眼に浮かぶものを、局長に見せるのは、彼としても許せない事。彼女に背を向け、そっと目に滲む水を時空改変で消した。

少し昔。

あの路地裏で出会った二人は、互いの秘密を共有した。

恵の分身の術、デュークの過去。

デュークの方は見てしまった恵の秘密を、恵は自ら語ったデュークの消せない過去を、絶対に漏らさないと約束して。

ここで意気投合した二人。のちに探偵事務所を作ることになるだが、それはまた別の話。

05・隣人調査と嫁入り娘：前編

丸斗探偵局に、依頼が入った。

最近各地で二セ札が多いという事もあり、局長の丸斗恵は助手であるデューク・マルトにしっかりと確認するように頼んだ。勿論、有能な助手にわざわざ言う必要はないというのは承知の上だが。

「それにしてもがめついですね局長……」

「だって最近ずっとコンビニの安いおにぎりで済ませてるから……そろそろお金が……」

「まったく、この前荒っぽく使ったからですよ……」

やって来たのは近所のアパートに住む管理人のおじさんだった。恵たちも時々スーパーなどで会う顔見知りの関係だ。

彼の持ち込んだ依頼は、「隣人調査」、近隣の人の身元や情報などをあたるものであった。

「実は……この住人についてなんです……」

「2階の3号室の……」

「男性の方ですね」

その男性の様子が、どうやら最近様子がおかしいらしい。カーテンはあまり開かなく、出入りも見られない。それなのに、何故かゴミの量が多いようなのだ。

「ゴミの量は、あくまでわしが見た判断にすぎんですが……」

しかし、余りにも不気味な事態に住人から不安の声も出始めていた。このままだとアパートの「格」にも影響を及ぼすかもしれない、と

言う事で二人に調査を依頼したとといういきさつである。

久しぶりの依頼と、予想以上の解決金で気分が舞いあがる局長をなだめながら、デュークはある程度予想していた。その男性の方と繋がりがある可能性は高いという事を…。

…その日の夜から早速作戦が始まった。局長自身の体を使っての張り込み調査だ。

ちょうど以前に起きた風呂騒動と同じように、数人の「丸斗恵」によるローテーションである。

彼女は「一人」にも「複数人」にもなれる。特殊能力の持ち主なのだ。

しばらく何も動きを見せず、次第に彼女にも飽きの色が見え始めた、そんな時であった。数日後の夜に、動きがあったのは。

今回も数人の「自分自身」で辺りを見回る彼女。

「今日は確か燃えないゴミの日だから…」、「弁当殻を捨てに行く率が高いわね…」

ただのゴミ捨ても、探偵にとっては大きな手がかりに変わる。腐っても探偵である彼女の本能が、感覚を研ぎ澄まさせていた。そんな中、携帯電話が鳴った。どちらの「恵」に鳴ったのかは定かではないが、その着信音を聞いて相手も「自分自身」である事は確信した。と言う事は…

「もしもし、こちらゴミステーション近くの恵！」

「はいこちら本部の恵。どうしたの？」

……へ！？なにそれ！？」「な、何かあったの？」

…三人目の「恵」が見たものは、まさに不可解なものであった。突

然、本当に突然男が現れ、たくさんのゴミを捨て、そして煙のように消え去ったのだという…。

その次の日。

「調べたのですが…以前のような未来の犯罪者があそこにいる、という資料はありませんね」

「そんな！どの機密文書にも？」

「ええ、最大で数千年後までの警察や防衛隊のコンピュータを可能な限りハックしてみたのですが…」

「ええ〜どうということ…？」

何やら物騒な会話をしている恵とデューク。デューク得意の時空改変で気付かれないまま未来のコンピュータに侵入して資料を探っていたようだ…

以前同じような手段で犯行に及ぼうとした悪質な未来人がいたという前例があったのだが、今回はどうもそれとは違うようだ。

「これはもう一度調べ直す必要が…ん？」

「誰か来たようですね」

インターホン越しに彼女が見たのは、どこか気品のある長髪の若い女性であった。基本的に予約を入れていない場合は断る場合が多いのだが、彼女の顔を見て、恵は用件を聞くことにした。その眼から、誰からも救いを得る事が出来ないようなオーラを感じたからである。

「どうぞ、お入りください」

「かたじけなく存じます」

どうやら彼女も身元調査に来たらしい。それも二人も調べてほしい

という。

「なるほど、結婚する事になって、ある方と一緒にいる予定だと」
大雑把に言つと、そういう事である。女性にとって結婚は重要な問題、恵が黙っているはずはなかった。

「しかし、密かに恋焦がれている方がおられるということですね」
「はい…左様でございます…」

物腰も良く、気品がある彼女を見ると、デュークはずばらでいい加減な局長と心の中で比べざるを得なかった。

富豪である彼女の両親としてはどちらか一方を選んで欲しいようだが、ある程度自由な気風らしく、最終選択権に彼女にあるらしい。その参考にするべく、探偵局に依頼を行ったのだ。そして、彼女の持ってきた写真を見て二人の探偵は驚いた。ホスト風の一方はともかく、もう一方は以前より何度も見ている顔であった。あのマンシヨンに住んでいる、挙動不審の彼だったのだ。

恵たちの選択は勿論承諾。女性問題と言う事で恵はがぜんやる気になっていた。

…そんな依頼人が去った後、テーブルの上には二枚の写真ではなく、二枚の葉っぱが載っていたことに気付いたのはそれからしばらく経つてのことである。

同時進行で二つの調査を行う探偵局。こういう時こそ、増殖探偵の見せどころである。

美人の依頼人の許嫁である「ホスト」班、挙動不審の「彼」班、（デュークがいる）探偵局班に分かれ、数人単位で調査をする事にな

った。

ホスト風の青年の方は、デュークが能力を使うまでもなくネットで結果が出た。たくさん株を持ち、それで生計をたてているカリスマ資産家らしい。ただ、詳しいプロフィールは裏サイトなどにも載っておらず、直接彼の家付近で張り込みを行う事に。

デュークから情報操作を用いるという考えも出されたが、局長に断られた。実地で張り込みしたいという行動派の心境である。

一方の「彼」班。張り込みを続けるうちに色々分かって来た事があった。

最近どうも探偵局近くで野良犬の声がうるさい…と思われていたがどうも彼の家から流れてくるらしい。一応ペットOKのアパートなのだが、それにしても野性味がありすぎるし、よく聞くと犬とは違う。

そしてもうひとつ。

恵「…あ…油揚げ…?」「」

探偵の技の一つにゴミ漁りがある。ゴミの中に様々な資料が入っている場合があるのだ。

なので皆さま、住所などが書いてある手紙などは手でちぎって捨てるようにしましょう。

…しかし丸斗探偵局はそんな用心も通用しない。お馴染みデュークの能力で、中身をあっという間に解析してしまうのだ。ただ今回は妙だった。燃えないゴミの中身の1/3が、近くのスーパーの油揚げ関連なのだ。

「油揚げ…大好きなんですかね…ってどうしたんですか、局長…」

「ねえ、デュークって妖怪とかの類とか、信じる？」

「あいにく僕は、裏付けされた存在意義が無いもの以外は信じない思考です。探偵として、当然ですよ。いきなりどうしたんですか？」
「ううん、何でもない」

…このとき、自分の推理に半信半疑だった恵。しかし、数日後、それは確信へと変わる。

「彼」がゴミ捨て以外の目的でアパートを出たのだ。

そのまま駆け出し、山の方へと向かう彼。後を追う恵だが、「彼の動きが結構速い。そこで恵が指を鳴らすと、山へ向かう道の角のいたるところに、恵と寸分変わらない女性が現れた。これが丸斗探偵局流追跡方法だ。

無論、前もってデュークに連絡し、ターゲットにはれないように「細工」を施してもらった。位相のずれた彼女たちの動きを、この街の人たちは誰も知らない。

それぞれ情報を共有し合い、合体して数を減らしながら「彼」のたどる道を把握していく恵。追跡の中、ターゲットは山の中に入ったことが判明した。

速報を受け、瞬間移動でやって来た助手のデュークを伴い、こっそり後をつける恵。

そして二人は見た。木々の生い茂る山の中で、一人の「人間」が、一匹の「キツネ」に変身するのを…。

06・隣人調査と嫁入り娘：後編

「彼」の追跡側が動きを見せていた頃、ホスト班も慌ただしくなっていた。ターゲットの男が家から出てきた。どうやら食べ物を買いにコンビニへ向かうようだ。

高めの弁当を買う彼：最近ずっと安物ばかりだったので羨ましがる尾行中の恵数名。すると、男の携帯電話に着信が入ったようだ。内容は至って普通の言葉だが、恵の地獄耳はしつかりと彼の言葉を嗅ぎつけ、脳内の辞書をフル活用させた。単語の繋がりを知識の中にある法則にあてはめると、完全にとある裏稼業の隠語である。

次の日の探偵局は、久しぶりに探偵らしい盛り上がりを見せていた。：と言つても、恵が数十人いるだけで違う顔はデュークだけという、遺伝子的に見ると寂すぎる組み合わせなのだが。

「彼」班は昨日の衝撃的な事実を。

「ホスト」班は男の不可解な電話を。

そして「本部」班。こちらにも不思議な事を知った。依頼人の男性と調査先の男。双方とも共通点があった。ある一定の時期から、公式の記録が一切残っていないのだ。デュークの力で過去の情報を洗いざらい調べてみたが、それでも駄目であった。

ふと恵たちの頭にある思いが浮かんた。過去の事が無い、過去の事を忘れている。まるで自分のようだ、と。それから始まった話し合いですぐに忘れ去られていった。それに、自分は過去の事を振り返らない性分、そんな事気にしないのだ。

そんな話し合いの中、資料として以前の写真が必要になったのだが、信じられない事が起きた。どこを探しても、写真が見当たらないのだ。念のために過去を観察し、その様子を見たデュークが、あまり見せない「驚愕」の表情を見せた。

「どうしたの、デューク!？」

「じゃ…写真が…葉っぱに変わってる…」

そして、ようやく「二人」は引き出しの中でおれている二枚の葉っぱに気付いた。恵は確信した。双方の事件に関する重大な情報。丸斗探偵局は、「化け狐」たちが巻き起こす騒動に巻き込まれたのだ。

「妖怪が本当にいるなんて…」

ひとり言のように呟く助手に、局長は尋ねた。

「未来じゃ妖怪なんて存在しないの?」

彼の様子からも分かるように、彼の来た未来では科学が感情論をも上回るほどに発達しており、妖怪ですらその存在を「肯定」したうえで「完全否定」されている。一言でまとめると、妖怪は「絶滅した」世界だと言う。

「確かに貴方の世界ではそうかもしれない。でもね、デューク。この世には科学がどれだけ進んでも絶対分らないことだってある。これだけは覚えておいて」

「…分かりました、局長。今回の一件、局長主導でお願いできますか?」

「前からそうだった気がするけどね」

…かくして、夜遅くまで「二人」は作戦を練った。今回の一件、強引(デューク曰く)だが鮮やかに(恵曰く)解決できそうな方法がある。

数日後の夜の繁華街。

ホスト風の男が、数人の男を連れて町を練り歩いている。資産家である彼の正体、お察しの通り化け狐である。ある方法で無尽蔵の金を持つ彼、夜遊びもお手の物である。

今日もまた数日前に出会った一人のグラマラスな「美女」と待ち合わせである。

「ごめんごめん、遅くなっちゃって…」

「いいさ、君を待つ時間もまた乙なものだからね」

「もう…」

顔はてれているが、内心はこの男を貶しているのは言うまでもない。

そして、彼女を連れて歩き出す男。その足は、ある路地裏へと向かっていた。こんなところに来てどうしたのか。その問いに、しばしの間をおいて、男は答えた。

「……………こうするのさ！」

腹に突然衝撃を受ける女性。あつという間に気絶してしまった。…しかし、それこそ彼女…丸斗恵の狙いどころであった。

|| || || || || || || ||

それから時間が経った、暗がりの中。服のまま縛り付けられている恵が、意識を取り戻した。それに気付いた男たちが、彼女を取り囲む。ホスト風の男以外にも、いかにも典型的な「不良」と思われるような格好の連中ばかりだ。しかし、恵はある程度彼らの正体について察知をしていた。

「なんのつもりかしら、化け狐のみなさん？」

「ほう、あんた俺たちの秘密知ってるんだね？」

あっさりと男たちが自分たちの正体を明かしてしまった事に、一瞬拍子抜けする恵。しかし、彼女とてそう簡単に自分の心の内を相手に知らせる事はしない。

「ええ、あなたたちが変身するところ、見せてもらってたの」
勿論、嘘である。

「ちつ、人間ごとに見られちゃうとは俺もまだまだだな」

「ごとき」。その言葉に、恵は引っかった。

「ああそうさ、お前らのような、化けられもしない、ころつと騙される愚かな生物にはこんな姿の方がお似合いさ！」

ネットで彼を支持する声が大きいの、彼が有りもしない嘘の予定や情報を載せただけ。少し考えれば無理だと分かるのに、誰もそれに気づかず、自分をいい人、尊敬する人だと崇める。

「あんな簡単に俺支持へ持って行けるなんてなあハハハ！」

「ネットはまあ…世論いじるの楽し…。それで、私をどうする気？」

こういう時の場合は、基本的にやる事は一つ。勿論、今回もそれであつた。

「人身売買」。

「だろうね…この流れだと」

「余裕ぶっこいていいのかな？どうせこれからお前は眠りに就く

ことになるのさ、この薬品でな！」

「そんなものに頼ろうとするなんて、あなたの方がよっぽど愚かじやない？」

「…こいつ、余裕ぶっこきやがって…！」

男が手を上げようとした、その時。

「はいはいそこまでー！」

ホスト狐とその仲間、そして恵が振り向いた先には、依頼人の女性。「彼」、そしてもう一人の恵がいた。一体何が起こったのか、一瞬男には理解できなかった。当然読者の方も理解できない可能性があるるので、説明しておこう。

実は、今回恵の一人を囷にする作戦と並行して、探偵局は「彼」および依頼人の女性と接触。

デュークは女性と。

「…やっぱりばれてましたか…！」

「いえ、僕たちも危うく気付かないところでした」

恵は依頼人と。

「びつくりしましたよ」

「俺たちの詰めが甘かったようですね…！」

あの鳴き声は「彼」が狐に戻った時の鳴き声であった。人間に化けて暮らす中、ストレスが貯まると元の姿に戻り、遠吠えをするようだ。

油揚げはもちろん狐だから…というわけではなく、単に彼が好物だったかららしい。

そして、もうひとつ重要な事が分かった…

「こ…これは…」

「おやおや、これは。そんなどんくさい田舎狐を連れてどうしました？」

このホスト風の狐こそ、彼女の許嫁として結婚をする約束を交わらせていたものであった。しかし、当然もう彼女には結婚する意志も欲も消えている。

「い…田舎…そりゃ俺は田舎だけど…」

「しっ、静かに…」

そして、依頼人も静かに怒っていた。自分では無い、故郷を貶された事に。しかし、それは隣にいる恵によって代弁された。

「どうしたもこうしたもないわよ！私たちは、あなたの化けの皮を剥がしに来たのよ」

「化けの皮？」

「この人はね、あんたと違って本物のお金で暮らそうとしてるのよ！ニセ札で稼ぐような卑怯者とは違う！」

その一言に、女性は驚いた。隣にいる、「田舎狐」の行っていた事に。

「本当にごめん、あなたに内緒で尾行をさせてもらったの。見たわ、求人情報を持って工場へ行くあなたを。」

「そ、そうですか…」

「けっ、そんなちんけな安っぽい所で働いて何になる！さあ、どう

か私と共に。私こそあなたにふさわしい…」

嫌だ。女性の鋭い言葉が、工場に響いた。

「お主のような、ウソつきの嫁になどならぬ！そして、他の生き物を弄ぶような事をするなんてもつてのほか！」

当然、怒り心頭のホスト狐。

「…なめてかかればこのアマども！おいお前ら、たつぷりもてなしてやれ！」

「「「おう！！」「」」

彼の「ダチ」が屈強な男に変化し、依頼人の女性らに迫る。

…しかし、迫られていたのは、男たちの方であった！

一人の男が肩をたたかれ、振り向いたその時、派手な音を立てて吹っ飛んだ！

そして男たちが気付いた時には、周りを無数の女性に囲まれていた…そう、まったく同じ姿形の女性から…。

「「「「「「「「「「悪いけど、私卑怯な手には卑怯な手で対応する事にしてるの」「」「」「」「」「」「」

「「「「「「「「」

…袋叩きの惨状から、仲間を見捨てて逃げ出したホスト狐。

（畜生…あいつ、あんな凄い技を…やつは人間じゃねえ！

…「」とどこまでくれば安心だ…次は別の姿になってまた再起を…）
「そうはいきません」

！！

狐の前に現れたのは、一人の若い「人間」の男だった。

「あなた、先程人間は愚かな生物、といたしましたね？

人間をなめると、痛い目に遭いますよ……」

妖怪の弱点は、自らの存在を崩される事。

未来の科学は、超的存在を抹殺し、神をも凌駕する。

それから数日後。

「で、ニセ札は全部彼の仕業だったという事ね」

恵が持つ新聞のトップ欄に、ホスト風の男の写真が大きく載っていた。偽札製造の容疑で逮捕されたのだ。デュークの怒りの時空改変によって、彼は過去を変えられ、一生人間のまま罪を償うことになっている。妖怪としてではなく、彼がずっと貶し続けてきた汚らしい姿として。

「ええ。先程過去へ跳んで確認したのですが、あの狐が今まで使用してきたお金、すべてが葉っぱを変化させたものでした。無論、局長が欲しがっていたあの高級弁当も葉っぱの金で買っていたようですね」

「これに気付いてたら、もっと早く私の行動力で解決できたのにな

……あちゃー……」

「まあ、いいじゃないですか。それに、局長もたまには僕に頼ってもいいんですよ」

「局長たる私が部下に頼ってばかりだと墮落するじゃない？だからさ？」

「……さすが局長ですね。」

その時、ドアが開いて恵と同じ顔の女性が入って来た。局長の分身……いや、こちらがオリジナルかもしれない。彼女には分身もオリジナルも関係ない、どちらとも「丸斗恵」なのである。

「で、どう?」

「ばつちり、ほれ! ちゃんとして依頼料が入ってるわよ!」

そう、あの夫婦と管理人からの依頼料金である。

その後、恵たちは管理人に納得できるような形で説明を行った。デュークもこつそり「協力」していたようだが。また、あの部屋にこれから夫婦で住む事になるだろう、ということも付け加えた。勿論本人たちも交えた話し合いの中で。

「うーん…夫婦の依頼料、分割払いローンも可って言ったけどこの金額は少な…ゲフンゲゲン」

「局長…大事なのは金額じゃないですよ」

「そうね、あの人、ちゃんと働いて本物のお金で過ごそうとしている。」「案外うまく人間社会でやっていけそうね」

「そうですね。今回の依頼、無事解決ということ?」

「「OK!」」

その日は、午後から雨が降って来た。空は晴れているのにも関わらず。

これを、「狐の嫁入り」という。

【強敵出現】

今、丸斗探偵局はかつてない敵に遭遇していた…

「いい、デューク？」

「はい、局長」

「今回の作戦は今までよりも難しいかもしれないわ」

「と言いますと？」

「今までは敵の動きが遅かったから一人だけで何とかできた。でも今回は敵の体力が比較にならないほどになってる」

「それは…まあそうですね…」

「今までの私たちの行動も原因かもしれない、って素直に言ってもいいのよ」

「いえ、過去の事よりも今どうするかが問題です」

「さすが理想の助手ね。…どう、敵はいる？」

「ええ、悠々と探偵局の部屋の中を歩いています…ドア付近と…机の近くですね」

「分かったわ。私が合図をしたらドアを開けて。」

「了解です」

「よし！」

「「こらー！ー！逃がすかー！」」

「あ、こっちに逃げた！早くタンス持ち上げて！」「あんな重いもの持ち上げれるわけ無いでしょ！」

「わーその私はやくドア閉めて！」「閉めたら意味ないでしょ」

「私が倒すのが任務でしょ」「それは私の任務よ！」

「あんたは私でしょ!」「そこ喧嘩してる場合じゃな…わわとんだ!あそこ!」

(局長…完全に僕の能力忘れてるよね…。ゴキブリくらい時空改変で消せるのにな…)

「『『『デューク邪魔!どいて!』』』」

「は、はい!」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

【デュークの大予言】

「ちよつと散歩行ってくるから、デュークお留守番お願いね」

「あ、局長!ちよつと待って下さい」

「どうしたのよいきなり?」

「さっき恵局長の未来を察知したのですが…」

「そっか、未来人だからこれから起きる事が分かるのか。で、どんな感じ?」

「このまま散歩にいくと…局長に恐ろしい事が起きる確率が非常に高く…」

「ふふ、何言ってるのよ!運命くらい簡単に変えちゃうんだから!それでは行って参ります!」

「あ、ちよつと…どんな事が起こるかまだ言っていないのに…大丈夫かな…」

そして散歩中…。

くく

「わっ!足元に犬のウンチが!…でも身代わり作ったからなんとか助かった…」

「わわ、危うくドブにはまり掛けるところだった… 分身能力で回避成功っ」と

「おっとっと…階段でつまづくところだった… 代わりがいるからなんとか私のケガは避けられたわね…」

「目的地の公園に到着！ちよっとのんびりしてよっつと」

…探偵局。

「デューク たっだい…ま…。あの…そこにいる三人の私は…なんでそんなにオコッテルンデスカ…」

「私の靴どうしてくれるのよ…」

「新しく買った私のジーンズ…」

「手の擦り傷痛いんだけど…」

「い、いやその…これは私にも不可抗力でね…ははは…」

「…だれが不可抗力じゃー！」「…」

ギャーヤメターフギャーヘルプミー！！！！

「皆様も、人の話は最後までちゃんと聞くようにしましょうっ」

|||||

【じゃんけん】

「局長って面白いですよね」

「…どうして？」

「今みたいに分身しても、なんか二人ともまるっきり一緒じゃなくて微妙に違うというか…」

「うーん…つまり」「双子とかそんな感じ？」

「それですね。…外見的には違いはないようですが」

「そういえば、私たちってどこか違いあるのかな…」「あまり考えてなかったよね」

「何が違うんでしょうかね…利き手も同じ、髪型も血液型も、細かい分子構造まで同じ…。そうだ、運の違いとかはどうでしょう？」

「…運？」

「たとえば…じゃんけんでどっちが強いとか…」

「へえ、面白いじゃないの」「いいわね、じゃんけんで強いほうがオリジナルと言う事ね」「それじゃあ私で決定じゃない？」「何言ってるのよ、あんたより私のほうが強いに決まってるわ」「私に決まってるわ！」「私よ！」

「まあまあ…ここは直接じゃんけん対決といったところで…」

「…望むところよ！」「」

ジャンケンポン！

1 回戦：グー・グー 「あいこね…」「もう一度！」

2 回戦：パー・パー 「またあいこだ」「次で決める！」

3 回戦：チョキ・チョキ 「またか…」「真似しないでよ…」

4 回戦：グー・グー 「貴方が真似してるんでしょうが」「勝手に決めないでよ！」

「50 回戦突破しちゃってる…」

「なかなか決まらないわね…よし、こうなったら！」

「わわ…局長がもう一人…」

「よし、多分私よりジャンケンに強いと思われる分身1号！ジャンケンに挑むのよ！」「ラジャ！」

ジャンケンポン！

結果：チヨキ・チヨキ 「あれ！？ちよつと何よ、あんたじゃんけん強いはずじゃないのよ！」

「へへへ〜こつちもじゃんけん得意な私2号を送り込んだのだった！」

「ぐぬぬ…こうなったら分身2号！ついでに私も参戦！」

(わわ…局長が5人、6人、10人…どんどん増えていく…とりあえず時空改変で部屋を十分に広くとらないと…)

時空改変中

(…よし、10倍は広くなった！これで大丈夫だろう！)

しかし、デュークの読みは甘かった。夕暮れ…

「…あの…局長…」 アイコデシヨ！アイコデシヨ！

「……何よデューク！」「……x約5000 アイコデシヨ！アイコデシヨ！」

「そろそろ決着をつけて頂かないと…時間が…」 アイコデシヨ！アイコデシヨ！」

「……まだオリジナルが誰か決まってるんだから邪魔しないで！ アイコデシヨ！アイコデシヨ！」

せーの、ジャンケンポン！…あいこか…「……x約6000 アイコデシヨ！アイコデシヨ！」

(うつ…こうなったら時空改変をしてジャンケンの結果を…)
アイコデシヨ！アイコデシヨ！」

「「「「「言っておくけど、時空改変で結果つけようとしたら承知しないわよ」ギロツ」「「「「「x約7000 アイコデシヨ！アイコデシヨ！」

「は、はい……」 アイコデシヨ！アイコデシヨ！

（帰ろうにもこの8、000人の局長でぎゅう詰めになって動けない…… わあまたあいこになってどんどん数が……。うう……局長の胸で息苦しい……どかさないと） アイコデシヨ！アイコデ……！

「「「「ちよつとデューク！どこ触ってるのよー！」サワッテンノヨー！」サワッテンノヨー！」「「「x約10000

「ひい、すいませ〜ん！」

（誰か助けてー！）

……その後、結局誰が勝ったかは「二人」以外誰も知らないのであった。

07 小ネタ集1 / 主要登場人物解説1 (後書き)

・主要登場人物解説・
まると・めくみ
丸斗恵

身長：160cm代前半

体重：SECRET

一人称：私

二人称：>呼び捨てく、 ちゃん、 さん、 (デューク)

三人称：あいつ、彼

概要、性格：丸斗探偵局の局長。探偵ながら頭より行動が先に出やすく、張り込みなどで得た情報を優先することが多い。また、体に似合わず武闘派な一面も。友情や正義感に熱く、決して悪を許さない一方で、怠け者、お調子者の一面もあり、助手のデュークに注意されてしまう時もしばしば。

外見：薄紫色の短髪、ナチュラルシヨートで、服装は露出を嫌う彼女らしく、冬は赤紫のパーカーの中に黒いシャツを着こみ、下回りはジーンズが主流。体つきはほっそりとしているが、胸のサイズは平均よりも二回りほど大きい。

能力：自らの存在を何重にも増やす事が出来る、「分身」を行う事が出来る。たくさんの自分との連携を駆使し、張り込みや搜索、追跡、さらに格闘まで様々にこなす。分身たちがターゲットへ向けて攻撃を行う直前に一人に戻る事で、衝撃を数百〜数千倍にあげる事も可能だが、後の筋肉痛が酷いらしい。

分身同士や分身・本物間で五感がある程度共有することが出来るが、

自らが分身であるという自覚以外は、基本的に分身の「丸斗恵」たちは本物の「丸斗恵」と独立して思考可能な一身体であり、自分同士で喧嘩をすることもしばしば。ただし、同一人物同士で考えは一緒のため、統率は非常によく取れている。
なお、彼女の秘密を知るのはアシスタントのデュークを始め一部の協力者のみ。

|| || || || ||

デューク・マルト

身長：180cm代

体重：？

一人称：僕

二人称：貴方、さん（局長）

三人称：さん

概要、性格：丸斗探偵局局長、丸斗恵を支える助手。見た眼通りの爽やかな好青年で、真面目な性格。どちらかと言うと肉体派の局長を、自らの知識と頭脳、そして能力で手助けする。基本的には彼女の言葉には従うものの、おかしいと思った事ははっきりと言う芯の通った部分もあり、時々不真面目になったり騒動を引き起こす恵に喝を入れることも。ただし決定権は大半の場合彼女に譲り、呆れながらも笑顔で見つめる事もある。

そんな彼の正体は未来からの逃亡者。かつては「犯罪組織」の一員、それも重要人物として様々な世界で目に余るほどの悪行を重ねてきた。俗に「第八の大罪」とも呼ばれ、彼によって存在を消された家系や生物種、果ては島や大陸は数知れず。しかし、ある事がきっかけで改心、現在に逃げのびた所を恵に救われ、以来彼女と共に活動している。

外見：服装は常に黒の燕尾服を着用しており、恵もそれ以外の服を着た彼をあまり見たことが無い。というより私服姿を見たことが無いらしく、浴衣や着物姿は何度か見ているようだ。

ネクタイは着用せず、Yシャツの上にベストを着る形である。近眼では無いのだが常に黒縁の眼鏡を着用してある。背中まで伸びる黒のストレートヘアーからか、たまに女性と間違えられる事もあるらしい。

能力：時空改変と呼ばれる能力を持ち、局長をサポートする。

どのような内容なのか、乱暴に言ってしまうえば「何でもあり」。過去を変えて歴史を自在に操る事も、地殻変動にきつかけを与えて大陸を作ったり気候変動を起こすのも、果ては命を創ったり消したりする事も自由自在。妖怪や神様ですら存在を消す事が出来ると言われるこの能力を駆使し、前述の通り各地で悪行を積み重ねてきた。現在はその時以上の力を有すると本人は自覚しているのだが、その分危険性もしっかり重んじており、局長や困っている良い人を助ける時、またちよつとした奇跡を起こす時などにしかなるべく使わないようにしている。ただし、余りにも局長が便利屋扱いした時には怒るのだが。

08・痴漢撃退作戦

「痴漢…？」

随分久しぶりに依頼が入った丸斗探偵局にやって来たのは、一人の少女だった。

見た目は高校生くらいだが、その眼はどこか大人びていた…。

「はい…そうなんです…。」

実は最近…電車を使う時に…」

「友達には相談したの？」

「その友達が最初に被害に遭ってしまって…それでそれから少し経って私も…」

探偵局長、丸斗恵としても女性の尊厳を散々に扱う痴漢など許すわけがない。少女の証言をしっかりと聞いていた。

「なるほど…貴方が被害を受けたのは、この鉄道…清風電鉄の本線ね」

近年でも沿線開発で大いに発展し続けている大手私鉄「清風電鉄」。しかし、乗客が増えるにつれて痴漢などの被害も少しづつ増えていたようだ。

「女性専用車もあるみたいだけど…使わないの？」

「あ、その…使った事はあるのですが…あ、あの時は…」

「あ、ごめんね。話したくないときは話さなくていいのよ。事件にはあまり関係ないことだし。」

何両目の車両か、何時くらいに被害にあったか、様々な証言を聞く

恵。すると…

「あの、ちょっと聞きたいんだけど…」

隣に座る、美形の助手、デューク・マルトが口を開いた。

「鉄道警察や乗務員の人には、その事を連絡したのかな？」

「ちよつとデューク、いきなり何よ…」

「いえ…局長には悪いですが、警察の方がそういう事件には専門ですし…」

「あ、あの…」

少し怯えるように、少女が口を開いた。

「すいませんが…この一件、貴方達が一番かと…勝手に思い込んでしまつて…」

「あ、いいのよそんなに心配しないで… デュークのバカたれ」

「う、ごめんね…。うん、でも僕たちをそこまで信頼してくれるんだつたら、お兄さんたちは力を貸すしかないね」

その一言を聞いて、少女の顔が明るくなった。

「ほ、本当ですか！ありがとうございます！」

こうして、依頼は決まつた。

依頼は、「痴漢の正体を暴き、警察へ突き立てて二度と痴漢が起きないようにする事」

報酬は、「清風電鉄フリーパス」

「…でもどうしてフリーパスなんだろう…」

「さあ…。でも一応かなり便利なものですね」

「そんなこと言っても私あまりあの鉄道使わないからね…
デューク、どうしたの？ なにか考えたような感じだけど」

「あ、いえ、すいません…他愛も無いことですので」

考え事をするついで右手の人差し指を顎につけてしまうデュークの

癖。長年コンビを組んできた恵が見抜けない訳がなかった。その予想は当たっていた。デュークは彼女に何かを察していたのだ。普通の人間とは違う何かを…。

「なんだ。じゃあそれよりも、早速痴漢を撃退するための方法を考えるわよ」

「了解です、局長！」

清風鉄道本線は、毎日たくさんの人々を乗せて走る通勤・近郊路線だ。日々たくさん列車が線路の上を行き来している。

しかし、この路線を走る列車たちは、希望や愛に溢れた人々ばかりではなく、悪意に満ちた人々も乗せなければならない。この男のよう…。

(ちょうどここがマッチポイント…かな)

彼が乗ったのは、朝7時45分の列車。私立高校が沿線に存在する花形線への直通便だ。

ちょうどこの高校は成績もさることながら、制服のデザインが近くの若者から比較的好評を得ていることでも知られている。

それは、彼のような「痴漢」の常習犯にも同じであった…。

男のジーンズの中には、小さな録画機能付きのカメラが埋め込まれている。お察しの通り、現代の技術では製作不可能なものだ。

ちょうどいい具合に車両が混んできた。ちょうど女子高生もたくさん乗りこんでくる時間帯だ…。

(よ、よし…今日はこつこつ…)

車両のブレーキで倒れ込んだように見せかけて、ターゲットの女子高生の尻に脚を当て、さわり心地を楽しむ。車両が混雑しているの
で、女子高生はむやみに声を出せない…。そのまま不自然な格好を
維持し、スカートの中を写せるように足先を移動した。このまま録
画し、家の中で堪能するつもりなのだ。
内部がスパツだろうが、尻フェチ胸フェチの彼には関係ない。

「のわわっ!!」

車両が停車するブレーキに油断してしまい、前で吊皮を握っていた
乗客が男にのめり込んでしまった…

「す、すいません…」

小声で謝る乗客に、舌うちで返す彼。気分を害したので、この駅で
降りる事にした。

その一部始終は、その乗客：デューク・マルトによって記録さ
れていた。

自らの体の構造を改変。一種のサイボーグとなり、潜入していたの
だ。

あらかじめ数回タイムスリップして男を特定。その後決定的な現場
を捉えるため、自らの眼をカメラにし、手先には相手の心を読み、
脳内映像を録画するためのデバイスを用意。ブレーキで倒れた時、
男の心を脳内部分に挿入されていたDVDに録画していたのだ。

ちなみに、あの時痴漢に遭った女子高生も、デュークが局長を基に
作り上げた罠だった。自分が痴漢にあったように局長は最後まで反
発していたが…。

「頭からブルーレイディスクを出すのはやっぱり不気味ね…」
「す、すみません局長…。」

でも、これではつきりしましたね、犯人は間違いなく…。」

あくる日。再び例の男は列車に乗った。今度は本線の列車。住宅街から市内中心部の企業ビルへ直結するため、ビジネスマンが多く乗る。

今度のターゲットは…

(この女だ…！)

ピンク色のビジネススーツに身を固め、胸も尻も完ぺき(彼の理論上)。はやる胸を抑えつつ、こっそりと彼女についていった。

今日は車内はかなり混んでいた。…と言ってもこの路線は毎日かなりの混雑度を誇る路線、仕方ない。…痴漢にとってはいい意味で。車内が混んでいるので、すぐにターゲットの尻に接触する事が出来た。今回はわざと手を下においていたので、手も使って触りまくり始めた。

「ああ… ああっ！」

…気のせいだろうか、あえぎ声まで聞こえてきた。p i i vの小説欄に転載するとR15になりそうなこの状況。次第にそのあえぎ声に男は引き込まれ、より手や足の動きを速めた。

…次第に男は異変に気付き始めた。あえぎ声が車内の各地から聞こえ始めたのだ。ふと横を見た時、予想は決定的になった。

彼の周囲にいた乗客が、全員目の前の女性と全く同じになっていた

のだ。声も顔も服も姿も何もかも…。

そして、一斉に男の方を振り向き、微笑みかけた。

これは夢だろうか…？いや、夢でないとおかしい…。ならば、夢なら…！

笑顔で「もっとしてくれ」の合図と捕らえた男は、堂々と胸に触った。大きい胸はさわり心地もよい。すると、近くにいる女性たちも彼に胸を当て始める。そして、次第に彼を波に巻き込むかのように、車内の奥へ奥へと誘導し始めた。

進んでも進んでも、そこにあるのは同じ顔、顔、顔…。まさにパラダイスのような光景に、彼は興奮の絶頂に達した。

そして、近くの女性の所のスカートの中に手を入れた時…

「……この人、痴漢です！！」「……」

突然一斉に放たれた言葉にびびった痴漢。しかし、本気で恐怖を覚えたのはここからであった。彼が手にしていたのは、スカートの中ではなく、「男性のスーツ」の上。すなわち、「股間」である…。彼にとっては余りにも嫌なさわり心地に手を引っ込めてしまう…。そして、周りを見渡してさらに恐怖を覚えた。

そこにいたのは、「女性」ではなく「男性」…。全員同じ冷たい目で彼を見つめ、冷酷さを際立たせるおそろいの黒スーツで痴漢を追い詰める…。

「……ほう、痴漢とはいけねえ奴だな……」

女性にとってはまさにパラダイスだが、（一部を除く）男性にとつ

てはまさに地獄。

そして、そのままドアの端にまで追い詰められた痴漢は…

…

鉄道警察に、痴漢の常習犯が現行犯で逮捕されたのはそれからすぐの事であった。

「男が男があわわわわわ」とまるで錯乱状態であるが脳内に異常はないようで、しばらく様子を見てから事情聴取をする事になった。

そして。

「局長：女性って、大変だったんですね…」

「でしょ…まあ私も…男性って、色々大変だな…って思ったわ…あの感触とか」

「僕もスカートがあんなにスースーするとは思いませんでした…」

実は、あの時の作戦で痴漢に触られたのは、女装…いや、一時的に性転換したデューク（+時空改変で作った彼の複製）の方だったのだ。そして、追い詰めた男というのは…デュークによって一時的に「男」になった恵とその分身たちであった。

あの後、女性を囮に使うとかどうかしていると機嫌を損ねてしまった恵。作戦だから仕方ないというデュークに突き付けたのが、今回の作戦であった。

敢えて立場を変える事で、わざと不自然な状況を生み出し、相手に

恐怖を覚えさせるのも狙いの一つであった。そして、それは見事に成功した事になる…。

「痴漢って本当に嫌ですね…。僕も実感しました」

「女性の敵っていう意味、わかったでしょ？」

「はい。…もう局長を困になんてしません…」

その会話から少し経ち、依頼人の少女が来た。

「本当にありがとうございます！お陰で私たちも無事に…」

「貴方の喜んでる顔、前来たときよりも輝いてるわ。どうやら心も無事解決したようね」

「はい！それでは…失礼いたします」

「え、ちょ、あの、フリーパスは…！」

そう恵が言おうとした時、既に少女の姿は無かった…。

「え…これってどういう…ってあれ？」

しかし、机の上には、報酬のフリーパスが乗せてあった。

「ま、まさか…お、お化け…？どういう事なのデューク…？」

「局長、これはこのフリーパス、使わないわけにはいかないようですね」

デュークは自らの予想が当たっていた事に気付いた。オカルトは信じない主義だが、今回は違った。証拠が揃っているのだ。

…少女の正体は、清風鉄道を日々走り、たくさんの乗客を乗せ続けている「列車」である事に。

09・恋するアプリケーション・前編

丸斗探偵局は、悩みの渦の中にあつた。

目の前にあるのは、今回の依頼人からの情報をまとめた資料。

「何かに行動を監視されている…か」

依頼人は彼女持ちの男子大学生。ある日を境に、携帯電話に不審な宛先からのメールが多発し始めた。最初は彼女に相談の上、業者からの迷惑メールと判断。メールアドレスを変える事で対処を行った。しかし、それから間もなく、再びメールが来るようになったという。

「そして、その内容がまるで彼の実生活への介入のようだ、と」

テストの具合が悪かった場合はそれを教えるような内容、寝坊した時は目覚まし時計の広告、風呂がうまく沸かせた時には入浴剤の内容が届いていたこともあつた。だったら別にいいのではないかと局長の恵は一瞬考えたのだがすぐに自分でその考えを否定した。見知らぬ誰かからのアドバイスは、確かに気持ち悪い物がある。

と言う事で、依頼料はバイト代の振り込みがまだと言う事で後払いにしてもらった。

助手のデュークと話し合うまでもなく、真っ先に思い浮かんだのは「盗聴」である。あの時聞いた話によると、彼のもとに送られてくるメールの内容の多くは、インターネットのSNSサイトに書きこまれた内容に基づくものであつたという。すると、犯人は恐らくネットに潜り込んでいる可能性がある。ただ、全部と言う訳ではなく、風呂の場合などは本人が独り言で言った内容だという証言も得た。

「複合的に監視していると言う事ね…」

こうなると、丸斗探偵局単独としては一つの方法を使うしかない。そう、ほぼ万能に近い助手のデューク・マルトの持つ力「時空改変」を用いて犯人を洗い出そうという作戦である。だが、今回はデューク自身から断りが入った。

「イレギュラー…?」

「はい。先程資料を参考に少し意識を過去に飛ばしていたのですが…」

「さつきばーつとしていたのはそれだったのね…」

「すいません…。それで、どうも相手は厄介なものかもしれない可能性が出て来たのです。」

局長も知つてると思いますが、僕の能力は…時空を操って過去を変える、というものです。ただ、それは時間の流れに沿って移動できる人たちにしか効かないんです」

「…ちよつとタンマ…」

そう言うなり、恵は三人に分身した。諺にもある、三人寄ればなんとやらを実践しようとしているようだ。

デュークは語りだした。自分が来た未来も含め、大半の生命は過去から未来へ移動する「列車」や「バス」など、時刻表などによって運転される乗り物に乗っていると仮定する。デュークが行う時空改変とは、いわばそれらのダイヤ改正。時刻表を変えて、乗り物の行き先を変える事が出来る権言だ。だが、中にはまれだが、「自家用」の乗り物を持ち、時刻表に左右されずに移動できる者がいるという。

「それが…」「イレギュラーか」「確かに異色ね…」

「ちよつと局長がその一つなのですが、どうもこの犯人…というより、黒幕がそれに値する可能性があるんです」

理屈はよく分からなかったが、原理ははつきりとした。確かに電車から自家用車を見つけても、駅に降りないとそれに乗り換えたりするのは難しいものだ。と言う事で、今回の一件に関しては丸斗探偵局の独自解決は難しいと言う判断になった。

問題はここからである。丸斗探偵局には、独自契約を結んでいるいわば「助っ人」がいる。以前の依頼で、盗聴関連に詳しい探偵を呼んだ事を覚えている方はいるだろうか。あの時は盗聴とは少し違う形の犯人だったために依頼料は無しと言う事になったのだが、今回はその助けが本格的に必要なになったようだ。ただ…

「お金がもつたいない…」

恵が躊躇していたのはそういう理由だった。助手としては納得いかないデュークが、結局押し切る形になって相談する事になったのはある意味当然の流れであろう。

「回転寿司代と助っ人の代金を天秤にかけないでください、局長…」

次の日。突然の依頼にも、助っ人はすぐに駆けつけてきた。

「ひっさしぶりじゃの〜！元気しotta？」

テンションが高めの彼女の名前は「陽本ミコ^{ひのも}」。主に盗聴関連の依頼を受けながら愛車と共に各地を回る、住所不定の探偵だ。

「相変わらずデューク君はイケメンで羨ましいわ。ほんと恵得じやわこれ〜」

正直なところ、恵があまり呼びたくなかった理由はこれである。季節を間違えたのではないかと思うほどの露出度のタンクトップを上半身に、右半分はジーンズ、左半分はホットパンツという改造ものを下半身に着込むという、この肉体派の美人が台無しになりそうなあの性格。スーパードル値引きセールで中年の女性たちに混ざってそうだと毎回恵は感じている。

「…あの…そろそろ依頼言ってもいい…かな？」

「…あ、そうじゃったそうじゃった。メンゴメンゴ…」

出身地の方言を饒舌に操りながら、ミコはその表情を仕事モードへと変えた。

…ミコへの協力依頼の内容は、丸斗探偵局の依頼人の彼の家の盗聴器の調査。調査報告書を見るなり、彼女はある事を言った。

「これって、依頼人の彼女への調査はやっとなるん？」

ある意味、デュークの予想通りの質問であった。勿論行っているが、まだそこまで深入りはしていなかった。もし彼女が犯人だったとして、それ以上踏み込んだらどうなるだろうか…。

「僕たちが逆に彼女のストーカーになる可能性が…」

「ただ、一応他の所を漁ってみただけ、それにあたる存在は見つかってないのよね…」

彼女の可能性が高い。これをはっきりさせるために、ミコの協力が

必要と言う事だった。

返事は勿論OK。改めて依頼人の男性宅を訪れる事にした。ただし問題が一つ。

「え、ダメ？」

「当たり前でしょ…なんでその格好で見知らぬ男性の所へ向かおうとしてるのよ…」

「え…じゃけえこれがうちの仕事着だって…」

「絶対駄目。もしこれで行ったら依頼料下げるから」

「鬼じゃこいつ…」

喧嘩しつつも考える内容はだいたい同じような二人を呆れつつも笑顔で見つめながら、デュークは早速依頼人の男性へ連絡を取り始めた。

それから数日後、恵の分身体を留守番に、デュークと恵、そしてミコは依頼人の住むアパートの一室へと向かった。

「恵はんの能力は相変わらず便利じゃなー…うちも分身してがっぼがっぼ儲かりたい…」

「あんたがやったら足引つ張りそうな気がするけど」

陽本ミコはカンが鋭い。テストのヤマカンはほぼ確実に正解し、宝くじも当たる日が多い。そんな彼女が丸斗探偵局と接触してから、二人の秘密を知るのにそう時間はかからなかった。ある依頼に協力した際に感じた違和感を、その瞬間を見る事で確信へと導かれてしまったのだ。

デューク曰く、ミコにはある程度未来を「固定」してしまう力があ

るらしく、丁度彼の持つ「壊す」ものとはベクトルが反対に近い事ができるようである。サルがキーボードでハムレットを全文打つのはほぼ無限の月日が必要となるが、ミコの手にかかることでたまために押しただけでハムレットの文章が数語の誤字だけで完成してしまうのである。ただ、肝心のミコも、あまり彼の話を理解しきれていない様子である。

念のために機材は持って来たのだが、実質そんなものは必要ない。ミコがある、と考えれば盗聴器が隠されている場合が多いのだ。ただ、やはり形から始まらないと決まらないと言つのがミコの信念である。そして彼女のもう一つの信念「最強の武器は最後まで取っておく」と言つ事が一番大きい。

「うーむ…」

丸斗探偵局。調査が終わつた後、フォーマルな服装に身を固めている二人の女性が、結果について話し始めた。

実質の所、ミコの予想通り盗聴器の反応がコンセントの中にあつたそれも一つではない、受話器部分やテレビの部分など、各所にあつたのだ。確実に盗聴の被害に遭つていると言つ事だ。こちらが出来る対処法として、盗聴器の部品を抜いたり電池を取つたりしておいた。これで「相手」側も恐らく大丈夫だろう…。

「ほんで、さつき戻つて盗聴器の発信部分を逆探知してみたんよ」

中古で買った彼女の愛するワゴン兼仕事場兼ロッカー、ボロのロッカーを省略して「ボロロッカ号」。この中に積み込んである電子機

器を駆使し、彼女は盗聴器などから怪しい電波を解析している。逆探知が出来ないはずの携帯電話やスマートフォンですら、ボロロツカ号の機材を利用すればすぐに探知が出来てしまうのである。

「どうやら、恵はんやデューク君に頼んだのは正解だったかもしれないのお……」

「…すると、やっぱり携帯電話とかスマートフォン…から？」

その時に感じた恵の予感当たっていた。ミコが調査した結果、そのスマートフォン番号は、あらかじめ依頼人から聞いていた彼の恋人のものだったのだ。

「…やっぱり彼女がストーカーのようね……」

「そのようじゃのお……」

悲しいお知らせをする必要がある。同性としてこのような事態は避けたかったのだが…。そして、電話口に出ようとした時、それを止める声があった。助手のデュークである。何故止めるのか、という二人の問いに、彼はミコにもう一度資料を確認するように言った。

恵にはよく分からない内容のグラフが連発する資料を読み取っていると、言う事は、恐らく今のデュークの脳内は「プログラマー」の知識で満たされているのであろう。

読み始めたミコの表情が変わり始めた。電波を出すように指示を出しているスマートフォンのプログラムが一つに限られているのである。

「ど、どういうことなの」

「恵はんには難しいかもしれんのお…要するに悪さをしとる大ボスがおるつつう事じゃ」

「それって…つまり、それを使って彼女が…？」

「それもあります、もう一つ可能性があります。」

もしかしたら、このプログラムが…」

「そじゃ！そっいやこのプログラムって、あれじゃろ、デューク君？」

スマートフォン用のアプリケーションで最近話題になったソフトがある。恋人が今何をしているか、何を食べているかを手の中で把握できるようにした、名を「O T E N T O」というものである。お天道様のように何でもお見通しのシステムのだが、情報漏洩や自由などの観点からネット内などで賛否両論を呼び起こしている。

「まだ推測かもしれないのですが…。」

もしかしたら、犯人はこのプログラム自身かもしれない」

10・恋するアプリケーション・中編

「プログラムが…犯人!？」

いきなりの発言に、恵は拍子抜けした。いくらなんでも突拍子も無さ過ぎる発言だろう、と突っ込みを入れようとした。しかし、助け船はコンピュータのプロからも入った。

「悪いけど恵はん、今回はデューク君が正しいようじゃのお」

「ええ!？ちよ、どうしてよ…」

納得のいかない局長。それもそうだ、「OTENTO」は話題になったばかりのプログラムである。幾らなんでもそんな訳のわからない事態が起こる訳が無い。

しかし、デュークは確信していた。

「局長、以前貴方が妖怪の事を教えてくれた時に、僕は言いました。目で見えたものは確実に信じる、と。局長も恐らく探偵なら、きつと目で見えてくれれば分かるでしょう」

「つまり…何が言いたいわけ?」

妖怪という言葉がさらりと出た事に勘の鋭いミコもさすがに驚くが、二人の間に割って入る事まではしなかった。結構頑固な局長の説得は、やはり一番信用する助手の任務だ。しかし、その助手が顔を向いたのは、意外にもそのミコ本人だった。

「ミコさん、変なお願いをしていますが…」

明日、貴方のコンピュータにお邪魔をしてもいいですか?」

「…へ???」

「まあ…そういう訳なんじゃけどなあ…こんな母ちゃんの腹の中から出て初めてじゃ…」

おっさん臭い一言を言いつつ、ミコは自らの愛車にぎっしり詰め込まれたコンピュータの画面と向き合っていた。耳にはめたマイク付きのヘッドホンから、デュークと恵の声が聞こえてきた。

今、二人はこのパソコンの中にいる。正確に言うと、二人の意識そのものが。自らをデータ化してネットの中に侵入、ふざけた真似をするプログラムに喝を入れるという事にしたのだ。ミコに一任するというのがデュークの案だったものの、いざ乗り気になった恵は逆に自分たちが入ればいいと提案したのだ。これはあくまで自分たちに来た依頼、ならばここで解決させなければ探偵としてのプライドが許せない、そう考えたからである。

「男らしいと言うか、イケメン的っつーか…」

『あのー私の性別一切入ってないのはどーゆー…』

『局長、もう少しですよ』

パソコンの画面に映るのは文字列が並ぶプログラミングの画面なのだが、それがここから見える今の二人の姿。扱いに長けているミコにとってはこのような事態はどんとこいのようで、慣れた手つきでプログラムを入力、的確に二人を案内している。

「そろそろじゃの、その壁を突き抜けたら彼女さんのケータイの中…というか『OTENTO』プログラムじゃ」

『ありがとうございます。局長…』

「ええ、ここは私に任せて」

そう言った途端、ミコのパソコンには何十列も同じ文字の列が並んだ。局長得意の分身である。それぞれがOTENTOPプログラムの壁の穴を探るべく動き出した。ただ、あまり増えすぎると彼女の携帯電話の機能自体にも支障が出かねない事を考慮し、今回は大人数の分身やデュークの時空改変能力の使用は抑え目にしてている。ただし…

「ん！？こりやまずい、デュークはん！」

『見えてます、ちょうど光線のように：向こうのセキュリティシステムが作動したようですね』

有事の時となれば例外だ。

まるで特定の部分を消すように、文字列が動き始めている。恐らくデータとなつている彼らの眼には、何か光線のようなものとして映っている事だろう。だが、こちらとて負けてはいない。助手の方は比較的軽い身のこなしで避けているものの、恵の方は搜索に重点を置いている事もあるために支援が必要なようだ。

ミコの手の指が、まるで量子力学上の電子のように動く。どの可能性にも対処できる凄腕だ。ただ、やはり相手は手ごわい。それに、静かな戦いの中でミコはどこか違和感も感じていた。対象物を消し去るプログラムが、ここまで長期戦を強いらせる事はあまりないはず。やはり、何かしらの「意図」を持っている可能性が高い。

そして、彼女の耳に待ち望んでいたメッセージが届いた。恵の一人がついに抜け穴を見つけたのである。追跡用のプログラムと頼もしい助手に後を託し、ミコは二人を排除しようとするセキュリティを撤く事にした。機械のように冷たく計算のみの力では、今回の事件の真相を解決できない、そう考えたからである。ただ、念のためにちよつとだけ細工を加えておいたのは、少なくとも恵には内緒にしておく事にした。

「一応あたしだって、今回の依頼主じゃけえの…。
お巡りじゃどーにもなららん相手、この手で焼き入れたる！」

二人が見たものは、無数の写真、ポスター、そして人。どれもみなある特定の女性のものばかりであった。そして、空間に響くのは無数の笑い声。勿論全て同じ声である。

「…改めて聞くと、結構不気味ね…」

問題発言をする局長を諫めつつ、デュークは彼女と共にそこに立つもう一人の影と対峙した。彼らの眼には、それはどこか卑屈な男…というより典型的なヲタ系の男に見えた。

『ボクハ彼女ガ好きダ』

先程から何度も繰り返されている言葉だ。全ては彼…いや、彼女の携帯電話にダウンロードされたアプリケーション『OTENTO』が語った。

そもそもこのプログラムの目的は、ダウンロードした相手を選んだ人物…例えば恋人などの位置などを知る事が出来るというものである。ネット上や最近ではテレビなどでもそれがスパイ行為ではないかと騒がれている。

だが、『彼』が語った真相は、それとは違ったものであった。

プログラムが真に監視していた者、それはこのダウンロードした相手そのものであったのだ。ネットの履歴、データファイルの内容、その全てを静かに、しかし確実に見ていた。それを聞いた恵の体に寒気がしたのは言うまでもない。

その後も『彼』は語り続けた。そうしているうちに、やがてダウンロード相手の写真が消されたりデータが消失する事が度々起きた。何度も吟味していくうち、それはその「恋人」からの電話やメール

の内容によるものであると言う事が明らかになっていった。恥ずか
しめな写真や失敗作、それらを消して言っていたのだがその行為を許
す事は出来なかった。

『ボクハ、彼女ノ全テヲ愛シテイタ』

そのような事が出来ない「彼」は疎ましい。
それが、あのような行為に走らせた理由であった。

「…どうしてそのような事を…」

『言ツタジャーナイカ、彼女ヘノ恋ダ』

「ふざけないで！」

説明は怒りの恵の声で遮られた。それは恋ではなく、れっきとした
ストーカー行為である。それ以前に、相手の嫌がる事を平気とする
事自体、セキユリテイシステムに消されていいレベルの悪事である。
例え相手が何であろうと、恵の持つ正義感は揺るがなかった。

『君たち二八理解デキナイヨウダ…ナラ』

冷たく、どこかねちっこいその声が響くと同時に、対峙する恵の体
に異変が生じた。まるで体の構造が書きかえられるかのように、全
身を痛みが走る。それが収まった時、『彼』はようやく自分の体に
何が起きたのか気がついた。だが、それと同時にその周りの情景も
変化を始めたのだ。グリッド上の地面が各地で盛り上がり、次第に
何かの形になり始めたのだ。
まさか、と思つた時には遅かった。

…以前、女性の尊厳を分かっていたいなかったデュークに女性役の囃を

頼む事で、彼に女性の気分を味わってもらった事があった。胸や急所を無理やり触られる事への嫌悪感、ついでにちよつとした興奮など。だが、まさか今度は自分が逆に同じ状態になるとは思わなかった。

『で…デューク…ああ…』

今、「彼」は無数の体に埋もれていた。どれも依頼人の彼女と同じ姿を取っている。男の体にとっては、女性の胸や尻を体に当てられる事、キスをされる事はどれも自らのホルモンを興奮状態にさせる事に値する行為であることを、無理やり局長は知らされる羽目になった。

『コレデワカッタダロウ、ボクノ気持チガ』

「分かる訳ないでしょ…この変態…くっ…」

言葉とは裏腹に、恵は自らの溢れる欲望に必死に耐えていた。今、彼の視線から見えるのは豊胸な肉体が作りだす肉の海。助手を呼ぶうにも、彼がどこにいるかも分からない。分身して逃れようにも、四方八方を抑えられ、どうにもできない。

…まさに絶体絶命であった。これ乗り越える方法は、果たしてあるのだろうか…。

11・恋するアプリケーション・後編

デュークの持つ能力である『時空改変』。過去や未来の様々な事柄を思い通りに変えてしまおうと言う、ある意味神を超えた能力…のようにも見える。だが、そこにはいくつか弱点がある事はあまり知られていない。例えば、今回のように…。

「くっ…！」

局長がはるか遠くで危機に陥っている事は、彼自身も知っていた。だが、無限に広がる空間からその位置を特定する事が非常に困難な状況となっていた。今、このネット空間は変態ストーリーカー…いや、意志を持ったアプリケーションの思いのままである。限定的だがデューク・マルトとほぼ同じ能力を發揮できると言う事である。

無数に群がる女体の山を何度消しても、次の瞬間には再び彼の視界を覆い尽くす。

『男八邪魔ダ』

「性別すらない君に言われたくないですね」

彼もこの外道への怒りを隠せなかった。だが、減らず口しか叩けないのが今の現状。これでは悪を砕くどころか局長救出すらままならない。そして、一瞬だけデュークの反応が遅れた。

その瞬間、肌色の濁流が彼を襲った。何とか自らの体を改変して位置を保とうとするが、勢いに耐えるだけでも精一杯だ。このままでは局長の体そのものが持たない。打つ手なしか、そう思われたその時であった。

凄まじい爆音と閃光が、デュークや恵の耳をつんざいた。

『ナンダト…!?!』

すぐさま目を慣らせたデュークと違い、恵が彼と再び再会できた事に気がつくのには少々時間がかかった。そして、もう二つ気付いた事があった。自分の体が元に戻った事。そして…

「消えた…!」

辺りを包んでいた濁流が、その姿を消していたのだ。と言う事は…

『待たせたのお!』

二人の耳に元気な声が響いた。

「ミコさん!」

「サンキュ、でも遅いんじゃないの?」

『ヒーローっつーのは遅刻が常識じゃけえの!』

『彼』は完全に油断していた。目先のこと 恵とデューク ばかりを優先しすぎて、その城壁を囲む防衛網へ回らなかつたのだ。ただ、その事はミコもある程度把握済みであった。いくら分身を出す事が出来ても、所詮はプログラム、容量には限りがある。あの時、デュークが濁流にのみ込まれた一瞬、外の守りは援護も出せず崩壊していたのだ。

『それに、お注射したけえもう分身は出せねえはずじゃ』

見る間にOTENTOの顔色が変わっていくのが、三人には一目瞭然であった。

「さて、と」

こうなれば、残るはただ一つ。最後の仕上げのため、先にデュークはミコに引き連れられ、元の体へ意識を戻す事になった。今の状態だと、もうこのプログラムは再起不能、好き勝手にされるがままと言う事だ。生理的に悪寒すら漂うほどの怯え顔を見せる変態を前に、局長の腕が鳴る。

「そんなに女性を味わいたいんなら…」

『ア、ア、ア、AAAfrwaertw9gJ9tarkAQ
// //』

壊れたふりをしても無駄である。どの道本当に壊れるのだから。

「楽しませてあげる」「」「」「」「」「」「」

一瞬だけ、プログラムの容量が限界にまで達し、その後『OTENTO』は完全に沈黙した…。

「…そうか、このプログラム自体に…」

「そうですね、スパイウェアが仕込んであった可能性があります」

本物の太陽の光を背に、二人の恋人に事の真相を語る助手。勿論あ

の大騒動は隠し、美味しい具合に埋め合わせを行っている。

ただ、やはり反応は予想通りであった。謝っても謝りきれない表情の彼女。だが、彼氏の方は優しく言った。それだけ自分の事を心配し、見つめてくれていたという気分だけでも、自分は嬉しい、と。

「そうね」

このような様子を見て助け船を出さない局長では無い。

「確かに今回は裏目に出してしまったかもしれない。でも、その誰かを想う気持ちは絶対に大事にしてほしいかな」

機械ではなく、人間同士のつながりを大事にするように、という忠告も付け加えておくのも勿論忘れていなかった。

そして、依頼人は笑顔で探偵局のドアを開け、希望の未来へと歩み出していた。

…だが、今回は一件落着とはいかなかった。少なくとも恵にとっては。

後日、とある寿司屋に、二人…たまに三人の女性と一人の男性の姿があった。

「随分と食べますね、ミコさん」

「まーな、あたしって漁師育ちじゃけえ海の幸は好きなんよ、なあ恵はん？」

「それは良いけどさ…なんでさっきから高いのばかり頼むわけ…？」

恵は恐れていた。自分の財布の残高が再びすっからかんになってしまふ事を。

と言うのも、あの時余りにも恵が分身し過ぎてしまい、携帯電話の機能そのものに支障が出てしまっていたのだ。他人の場所に潜り込んで迷惑をかけると言うのは、探偵として余りにも軽率な行動である。勿論デュークやミコが協力して治したものの、時空改変で一旦時間を止めたにもかかわらず1日以上かかってしまっていたのだ。

と言う事で、責任を取って全額恵の給料と言う事で回転寿司に行く羽目になったと言う事である。

「あ、そうだ…ちょっと私用事を思い出して…」

「局長」

「恵はん」

「おい私」

…分身に押し付けて逃げようとする彼女だが、やっぱり駄目であった。結局せつかくの報酬も一日でその多くが消えてしまう事になるのであった。

「…あんたが悪いんだからね」

「貴方だって私でしょ…ってそれ私のウナギ！返せ！」

「私は貴方でしょうが！というか今食べたら元に戻れないじゃないの！」

「だからって今食べたら…」

「デュークはんも大変じゃのお…」

「いえ、慣れてますから」

なお、後日新聞に掲載されていた記事で、丸斗探偵局は『OTEN

TO『アプリの開発中止及び回収の情報を知った。隣で笑顔を返す例の男が一枚噛んでいるのは言うまでもない。』

12・丸斗恵の定例報告 / 主要登場人物解説2

みんな、結構寒いけど元気にしてる？丸斗探偵局の美人局長こと丸斗恵です。∴助手、笑うな。

私も時々「小説を読もう！」とか「にじファン」とか見てるけど、なんか自分の代わりが欲しいから新しい自分を作る人を見かけるよね。確かにその考えは正しいし、そういう能力持つてる私もたまにしちゃう。でも、基本的にそれって自分を大事にしない、自分に優しくないって思わない？自分を墮落させると、必ず大きなしっぺ返しが来るのが、この世界の鉄則ってわけ。

∴え、なんか納得いかない？∴もう、そんな困った人のために、今日はちょっとこういう話を用意したわ。これを見て、今日は話を進めていこうかしら。

この前の事件で私たちに協力してくれたミコって人、覚えてる？あの人中ホットパンツだけど寒くないのかな∴というのはさておき、デュークが持っている盗聴やコンピュータの知識の多くは、彼女から得てるのよね。うちの助手は特殊能力ですぐに相手の情報をコピーするから油断ならない。

ミコと出会ったのは、前の事件みたいにどっかの工場の人が情報漏えいの疑いがあるっていつて私たちを頼って来た時ね。まだ探偵局を建ててからあまり経ってない頃かしら∴。

助手のいる未来では、盗聴はレベルを変えてより巧妙化してるんだって。なんか位相がどうたら言ってたけど、そんな居候なんて知ってたこっちゃない。でも、そのためにあの時のデュークはこれらに対

する知識を持ってなかった。確かに時空改変でどんな存在にもなれる彼だけど、ごっこ遊びじゃなくて本気で挑む時にはやっぱり経験が必要なんだって。

…まあうちの助手が本気出すと宇宙ヤバイというのは多分皆知つての通り。

私もあいにく盗聴まで頭が回ってなかったという事で、ちょっとお世話になってる別の人の紹介で…人なのかなあのおじさん…まあそれはさておき、ミコに協力を依頼するようになったという事。ただ、あいつはなんでああカンが鋭いんだろう…。デューク曰く時空を固定とかなんとか言ってたけど、要するにゴキブリに対する殺虫剤みたいな感じかしら。デュークがゴキブリだとすると、ミコがその得意分野を封じる殺虫剤。でもゴキブリはそれに対する耐性を身につけて…え、なにデューク、なんで自分がゴキブリなのかって？なんとなく。

そんなこんなで、あれは結局盗聴器とそれに関わるハッキングが全ての要因と言う事が判明、犯人宛にはミコからウイルスがたっぷりプレゼントされたみたい。いい気味だよな。

…さて、ようやくここで本題に入ろうかしら。

デューク、前の資料ある？ …ああこの袋、さすが整理整頓出来るわね、いい助手だ。

…うるさい、私だつてたまには整理整頓するわよ。

さつきも言ったけど、今のデュークの盗聴関連の専門知識はミコから得たもの。でも彼女も結構がめついたりところがあるのよね…報酬で何が欲しいって言ったと思う？特殊能力よ特殊な。しかも何故かよりによって私と同じ分身ときたもんだ…。

どうやらあの時に何人かに分かれて情報搜索を行った私を見てティ

ンと来たらしい。でもね、私はあまりいい気分はしなかったな……。だって考えてみてよ、まずこの分野は私が先駆者なのよ？その私におとがめも無くって変じゃない？…いやデューク、これはあくまで一つの理由よ、まだあるっつーの。

あのね、私みたいな慣れてる人はまだいいんだけど、慣れてない人が分身とかすると絶対碌な事にならない。カンが鋭いはずのミコだけど、あの時は絶対欲に走ってたわね。

分身が専門分野の私には分かった。ミコ、絶対自分の身代わりが欲しいんだって。そして自分はぐーたら楽をして、儲かりたい。

…ただ結局デュークに押し切られる形で、彼から能力もらう事になったんだけど。あの後だっけか、私が結構本気で彼を怒ったのって…いいのよ、私もかっとなりすぎから。まあ自分が同じ状況だと涙目になるのは当然よね、四方八方から同じ声で説教なんてよっぽど変な体質の人じゃなきゃ怖くて泣くにきまつてる。え、私？…私だって嫌だ。

で、やっぱり案の定だった。

あれから数日経って、うちに依頼が来たの。珍しく団体さんかと思ったら、全員なんかフード被ってやってきた。しかも大勢。デュークのナイスアシストがなきゃこの探偵局が満員電車になってたわね…。

そしてフードを脱いだその姿に、私のカンは見事に的中した。全員、ミコだったの。みんな同じ衣装で同じ髪型。そして皆どこか怒ってる。

原因はやっぱりオリジナルのミコだった。あれから仕事をじゃんじゃん増やして分身たちをじゃんじゃん出して、そしてその分身をこき使ってたらしい。上下関係が生まれちゃったみたいなの。私の場合は情報共有とか出来るからそういう事はないと考えてほしいんだけど、慣れてないところという事態になる事が多い。気がする。

さすがにデュークも自分の起こした事態を重く見たらしい。満場一致で、依頼を受け取る事にした。

「本物の陽元ミコへの復讐及び分身の人権侵害の告発」

そしてここから、作戦報告よ。いやー、結構おもしろかった訳で。デュークにも全面協力してもらって、街の構造ちよつと変えて大掛かりないたずらを仕掛けたわけ。

まず、助手に時空改変でこの街そのものを一旦時間止めて封印した後に、それとそっくり同じ街を創りなおしてもらった。そのままでもいいんじゃないか、って思う人いるかもしれないけど、未来の法律にギリギリ抵触しないでこれをするにはこれが最適なんだって。

…まあ昔相当ワルだったみたいだし。で、その後空き家になってるその家に人を配置。誰って？勿論私よ。デュークのお陰で全員見た目はその家の人に見えるようにしてるんだけどね…本物のミコだけには。そして、ミコの分身たちに各場所へ行ってもらって、これで準備完了。凄いでしょ、作戦フィールド完成よ。

さあ、そこからがまた楽しかった。…え、イタ電？変な事言わないでよ、これが作戦だって言ったのどこのどいつ？

…ま、まあする事と言えば、本物のミコに電話をかけるだけ。勘の鋭い彼女だけど、やっぱり予想通り、最近さぼってばっかだからえらい鈍ってたんだって。デュークが状況を監視してたなんて全然気付かなかったみたい。

で、その時の内容が「仕事内容の注文」みたいな感じなの。さすがフットワークの軽い彼女、「重要な要件」って言えばすぐにやって来た。さあこの後が名探偵丸斗恵の見せどころ。クレーマーの如く烈火に怒った私はミコが行った用件が全然上手く行ってない事を散

々に言う。慌てるミコだけど全部自分がやったんだろ、って詰めかければもう否定できない。分身がやった可能性もあるからねー。ま、勿論全部ウソ。ちよつとデュークの力借りて、脳内にその記憶を一時的に作ってもらったからさすがの彼女にも嘘がばれなかった。そして怒った分を直してる時に、彼女の携帯にもう一回別の私が連絡をする。この後は説明しなくてもだいたいわかるかしら。…え、説明した方がいいって？いや、どれも一緒でしょ？行った先でまた怒り、そこからまたクレームの電話。その繰り返しじゃない。さすがに10回もすると彼女も頭に來たらしい。怒って分身を呼び集めようとした。

ここからが分身のミコたちの出番。ちよつど彼女がいる傍の家で待機してたミコの分身の一人に、ドアをけたたましく開けて全速力で走ってもらった。こんな状態で大きい声で「コラーツ！」って言えば、まずい状況をした事が嫌でも分かるでしょう。で、わざと本物のミコがそれを確認しやすい場所でそれをやってもらった。

それを見たミコ、見事餌に引っかけた訳。追いかける彼女の後ろで、また同じような事をやってみた。さあどうなるか。今度はそっちの方に気を取られる。そしたら次にまた。そっちに行く。そしてらまたまた…。これを何度もやっていくと、さすがのミコも参り始めたみたい。でもまだ反省まで至ってないようだったので、念押しでもうちよつと増強してみた。

本家増殖探偵たる私、人員補給はお任せあれ。あつちのドアからもこつちのドアからも、どんどん自分が出てくるような状況になるとさすがに分身能力を持つ怖さっていうのが身にしてみたみたい。だってそうでしょ、やめろって言うてもどんどんと自分が増えて道を覆うあの感じ。私はもう慣れっただけど、慣れてない人は大変だと思っよ。あの怖がりようを見れば。

…で、後はもうこっちのもんだった。分身たちをこき使った事、自分だけ楽しもうとした事。怖かったと抱きついて泣きながら私に謝った。正直謝るのは分身たちの方だと思っただけど、もうその時には他のミコは本物と一体化して消えていた。多分心底反省した事を感じていたんでしょ。だって消える直前笑ってたもん。

その分身たちから貰うはずだった報酬は、ミコの稼いだお金から貰う事になった。

…まあそこまで多くは無かったんだけどね、正直言つて。うるさいわね、金額って大事なのよ。助手みたいな何でもありじゃないのよ私は。

勿論今のミコは分身能力なんて持っていない。デュークに消してもらったからね。でも、それから彼女は結構各地で様々な人脈を持つほど大活躍してるらしいわね。良い事じゃない？体が一つだけあるからこそ、いろんなところで大活躍できるってこともあるのよ。

あ、ちゃんと町は元に戻った。タイムカプセルみたいな状態にしたから、すぐに人々は元に戻れたんだって。昔はそうとう悪い事に使ってたみたいだけど…どんな事かは怖いから聞かない事にしたけどね。

と、まあ今回はこれくらいにしておこうかしら。デューク、ちょっとこのファイル戻ってきて。…はいはい、どうせ私も面倒臭がりですよーだ。

じゃ、次回もお楽しみにね。

12・丸斗恵の定例報告 / 主要登場人物解説2（後書き）

【登場人物】陽元ミコ（ひのもと・みこ）

身長：

体重：SECRET

一人称：あたし、うち

二人称：はん（恵はん、デュークはん）

三人称：あいつ

概要：愛車ボロツカ号を使って各地を回る、盗聴専門の探偵。恵たちとは盗聴事件を通じて知り合い、互いに強い信頼と協力関係を維持している。生まれは中国地方らしく、方言を多用する。

性格：気さくで出たがりなお調子者で、友人の恵とは似たもの同士。事件の時や得意分野の時は冷静な顔を見せる時はあるが、基本的には猪突猛進型。

外見：黄色に染めた髪に、ほっそりした体つき。上は黒か白のTシャツ、下はホットパンツ。基本的にインドア派らしく、あまり季節によって服装を変えないらしい。

能力：ボロツカ号に満載されたコンピュータを駆使し、ターゲットの盗聴器を探知、場合によってはそれを逆利用して相手を痛い目に合わせる事が出来る。並のハッカーでも入りこめないようなセキュリティシステムも、彼女の手にかかると数十秒で崩してしまう。また、彼女自身にある程度の予知能力があり、未来を少し「固定」する事が可能。ミコは自分の知識のみならず、経験やその能力も重要視している。

13・襲来・局長地獄

デューク・マルトの能力、『時空改変能力』。だが、それは彼自身が本来持っている能力では無い。彼のやって来た未来では当たり前であるが、脳の内部にナノマシンで構成された一種の人工回線が組み込まれており、それが超能力を呼び起こしているのだ。だが、人工物である故に、機能不全、つまり「故障」という事態は避けられない。今回はそのような話である。

「ねえデューク…大丈夫なの？」

ある日の丸斗探偵局。恵は助手の様子を見て心配顔であった。どこか頭に違和感を感じていると言うのだ。以前彼の能力の秘密を聞いていた局長としては、助手にはあまり無理をさせるような事はさせたくない。しかし、当の本人は大丈夫だ、と一点張りであった。

「このような場合に備えて、僕たちの脳にはあらかじめ修復用のナノマシンが備わっているんです」

少しの傷なら数秒で修復が可能なのである、というデュークだが恵はずっと心配していた。軽い症状でも病というのは油断すると次第に大きくなってくるものである。その予知が当たったかの如く、局長の目の前で突然脳内に大きな空洞が出来たかのような痛みを感じ、倒れこんだデューク・マルトのように…。

…目が覚めた彼が目にしたのは、心配そうな顔の局長であった。

「デューク…大丈夫？」

「ええ、何とか…」

もう頭の痛みは薄れ、普通に喋る事も可能になった、とデュークが言うと、恵の顔が変わった。その眼に涙がにじみ出ていたのだ。こんな局長、見た事が無い。そしてそのまま彼に抱きついてきた時にようやくデュークは何かがおかしい事に気がついた。あの局長がこんなに自分を頼りにするような行動は普通しないはず。それに服装もどこか胸や太ももを見せつけるような、局長では絶対着用しない格好だ……。何とか抱きつく局長を引き離れた直後、突然ドアが開いた。そこにいたのは、もう一人、全く同じ姿形をした丸斗恵だった。どういう事なのか、と驚くデュークの前で彼女は大声で言った。

「私のデュークに何するのよ!」

…絶対局長はそんな事言わない。

「何よ、デュークは私のものよ!」

「ふざけないで、デュークは私のものに決まってるじゃない!」

こういう事も絶対言わない。一体何が起こっているのだろうか？

そんな唾然とした一人の男が見る前で、どんどん女性の数が増えていった。いや、増えているというよりもどんどん押し寄せているのだ。そして口喧嘩をしながらもデュークの名前を呼んでいる。デュークは私のだ、いや私のだ、いや私だ、私のものだ。まるで彼を求めているかのように。

自らを透明にしてその場をこっそり離れ、どんどん「探偵局」に押し寄せるかのように来る局長をなんとか避けながらデュークは外に出た。そして、その光景に唾然とした。街中をたくさん局長が歩いている…というのは、彼女の分身を見慣れている彼には普通の光

景。だが、それよりもがらりと街の様子が変わっている事の方が彼を驚かせた。右に有る建物も「丸斗探偵局」、左も「丸斗探偵局」……どこへ行っても、何階を見てもそこにあるのは「丸斗探偵局」……。ようやく彼は気がついた。『時空改変』に関わる回路に、深刻な不調が生じている事に。

右を向いても局長、左を向いても局長。そんな空間内に、彼はこっそり自らの体を透明にして身を潜めようとするも、そうしようとした直前に恵の大群に見つかってしまった。

しかし、このままでは自分自身が危ない。

「す、すいません局長！」

デュークは背中に黒い羽を生やし、恵を数名吹き飛ばして上空へ避難した。

間違いなくこの世界を作り出した原因は自分自身だ。脳内に埋め込まれた回路が不調を起こし、歪んだ世界を創りだしてしまった。幸い医療用ナノマシンが増幅されて急ピッチで脳内にて復旧作業を続けているが、それにしてもこのような光景を創りたいと言う願望が少しでもあった事を彼は後悔した。何千メートル高く飛んでも、目の前に見える景色は同じ。右にも左にも、「丸斗探偵局」という看板があるビルの階が立ち並ぶ。局長とずっといたいという思いが、時たま「世界が自分たちだけだったら」というものに変わる。人間ならたまにやってしまう事、やはり未来から来たとはいえ彼も同じであった。

しかし、安心できたのもそこまでだった。下から聞こえる、背筋を震えさせる幾多もの声のユニゾンに下を見下ろした時、彼は絶句した。今彼がいるのは、上空数千メートル。それなのに、目の前には

どんどん自分に近づく無数の局長の体の大群。それが意味する事、それはすなわち数千メートルまで地上が「丸斗恵」の無数の体に埋もれていたと言う事である。

必死になって逃げるデュークだが、そこまでであった。空へと逃げる道も無くなっていた。笑顔を振りまき、空からも局長の体が降って来たのだ。なんとか退けようとするも、数はどんどんと増えてくる。大きな胸を彼に当てんとする女体を避けるためにバリヤーを張って最後の抵抗をするが、それでも追い付けなかった。そのバリヤーに、大量の局長がしがみつき始めたのだ。どんどんと重くなるバリヤーに、彼の翼は耐えられなかった。

ついにデュークは抵抗する手段を失った。下から迫りくる濁流と、上から降って来る豪雨が、ついに彼の体を奪った。

「デューク」「デューク」「デューク」「デューク」「デ
ユーク」「デューク」「デューク」「デューク」「デュー
ク」「デューク」「デューク」「デューク」「デューク」
「デューク」「デューク」「デューク」「デューク」「デ
ユーク」「デューク」「デューク」「デューク」「デュー
ク」「デューク」「デューク」「デューク」「デューク」
「デューク」「デューク」「デューク」「デューク」「デ
ユーク」「デューク」「デューク」「デューク」「デュー
ク」「デューク」「デューク」「デューク」「デューク」
「デューク」「デューク」「デューク」「デューク」「デ
ユーク」「デューク」「デューク」「デューク」「デュー
ク」「デューク」「デューク」「デューク」「デューク」
「デューク」「デューク」「デューク」「デューク」「デ
ユーク」「デューク」「デューク」「デューク」「デュー
ク」「デューク」「デューク」「デューク」「デューク」

ク 「きよ…局長…やめ…」 「デューク」 「デューク」 「デ
ユーク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デュー
ク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デ
「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デ
ユーク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デュー
ク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デ
「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デ
ユーク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デュー
ク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デ
「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デ
ユーク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デューク」 「デュー
ク」 「

まさに悪夢であった。無数の体に自由を奪われたデュークは、もう
何もできない。時空改変で押さえつけようにも、恵の数はそれで対
処できる限界を既に上回っている。成す術もないまま、彼の意識は
事切れ…。

「…ユーク！デューク！」

「…きよ…局長!？」

目覚めた時、彼がいたのは丸斗探偵局のソファの上であった。額に当ててあったタオルは、自分の流した汗で濡れとなっていた。相当うなされていた、と恵は言った。

心配させるんじゃない、と告げるその口調は厳しかったが、彼は確信した。ここは間違いなく自分のいる丸斗探偵局、そして局長である、と。

彼の見た異世界の様子を聞いた時の、恵の表情は少々言葉にしにくいものがある。嫉妬と呆れと、そして不安から解放された笑み。やはり故障も病気も、早めに気付いたら処置を施すのが一番だ。助手に対しての、自分の経験から言う助言であった。

時間は倒れてからまだ一時間も経っていない。外はまだ朝、丸斗探偵局の仕事は始まったばかりだ。

なお、その後丸斗恵の無数の体で埋め尽くされた地球及び異次元がどうなったか、知るものはいないであろう。ただ確かなのは、今もなおその体は増殖を続けている事である。現在の総数、推定1000兆人。

14・最悪の予兆

丸斗探偵局の朝は早い。助手のデューク・マルトは、毎朝八時に出勤し、正装そのままに資料の整理を始める。今日はちよつと資料も多めなので、局長の「能力」をちよつと拝借し、数人がかりで整理をしている様子。怠けてばかりの局長とは違い、テキパキと仕事を終わらせたデュークたち。

…しかし、待てど暮らせど局長が来ない。朝が苦手な恵が、助手のデュークよりも遅く来るのは日常茶飯事なのだが、それにしても遅い。

(局長やっぱり遅いな…。今日も殿様出勤かな?でも無理やり局長に早起き癖を「植えつける」のみな…)と、その時デュークの携帯が震えだした。局長からの電話だ。

「局長!もうこんな時間ですよ、早く来ないと…」

『でゅ…デューク…ごめん、今日…』

「…え?局長…何が…」

デュークが話しかけようとした時、探偵局のドアが開いた。

「あれ、局t(ry

「痛ててて…デューク、ちよつとトイレのドア開けてくれる…?」

「ど、どうしたんですか!?!」

「いいから早く!いい、痛たたた…」

「きよ、局長…」

(これは…嫌な予感がしてきた…)

恵も落ち着き、デュークは局長に事情を聞いた。

「つまり、今ここにいる局長は、オリジナルの局長が寝坊に備えて創りだした分身だと」

「それは私の事ね」

「そして、オリジナルより早起きして、探偵局に行く途中に急に腹痛に襲われた、と」

「そうなのよ…昨日の夜に熱をだして、下がったと思ったらこうなっちゃうて…」

ちよつと待つて下さい、と言ひ、デュークは指を鳴らす。

時空改変で医者の技術を借り、病名を探ると、「ウイルス性胃腸炎」という言葉に行き当たった。

症状を改めて確認し、「クロ」だと認識する両者。…恵の顔は辛そうだが。

「無理しないでもいいですよ局長、今日は休まれても…」

「駄目よデューク、あくまでも私が局長、あんたはまだまだ助手でいるべきじゃない」

「なんですかその理屈…なんなら自分が予備の「局長」作つて…」

「それだけは絶対駄目!…い、痛い…」

「す、すいません… 肩貸してあげますから、トイレへ行きますよ」
「…」

(まずいぞ…かなりまずい…このままだと居場所が…)

それから何度かトイレへ駆け込む事態が続き、さすがの局長も限界ということで、一旦引き上げる事になった。

それに、家から出られない状態に在るであろうオリジナルの様子も気になる…

疲れの色が見える恵のため、デュークは彼女を片手で抱きつつ瞬間

移動で恵宅へ行く事に。

マンシヨンの一室にある局長の家。彼女から貰った合鍵を開けた時、デュークは愕然とした。

そこには、ぐったりしている局長が床で座り込み、カーペットで寝転がり、イスにもたれかけ…

「きよ…局長が10人!？」

どうやら「波」が収まった隙に分身を探偵局まで行かせようと何度か試みたようだが、全て撃沈してしまつたらしい。

「…下痢薬飲んでも効かないし…どうしようデューク…」「…」

「局長、この腹痛と下痢には効果がないですよ」
あくまでも分身に行かせようとするあたり、今日の仕事をさぼるつもりだつたのか、と腹を読むデュークだが、今はそう言う事は言っていない。探偵局へたどり着けた分身体の恵と、その助手は、部屋でくたばりかけている局長たちに病気について説明をした。

高熱は起きるが、すぐに収まる。しかしそこから腹痛が始まり、下痢が止まらなくなる…このウイルス性の胃腸炎には特效薬がなく、抗生物質や解毒剤を飲み続ける事で時間をかけて治すしかない。勿論正丸は効果がない。ただしこれは「現代」の話。「未来」にはちゃんと専用の特效薬が開発されているのだ。

「それで、先程仕入れてきた特效薬がこれなのですが…それでも治るのには最低一日はかかりますね…」

「…時空改変でなんとかならないの?」「…」

「いえ…もしこの能力で治したとしても、また同じ病気にかかることは限らないでしょう?」

「だから先に局長の体に免疫をつけるんですよ」

「…なるほど…(よく分からん)」「…」

(局長：「すみません、本当は治せるんです…」)

ただ、局長がこんな状態で大がかりな時空改変を使うと…)

デュークの渡してくれた薬を飲んだことで(謎の白い液体だったらしい)、取りあえず落ち着いた恵一同。

「……それで…デュークはどうするの?」「」「」

「自分は…今日一日ここにしようかな…」と

「心配…してくれてるのか…じゃあ…」

しかし、探偵局へ行った恵からの提案は他の恵たちにさえぎられた。彼女を除く全員の考えは、デュークをこのまま探偵局へ戻すというものだったのだ。

批判する分身体だが、確かに今デュークがいないと探偵局にもし人が来たら留守と言う事で帰ってしまい、金づるが消えてしまう…という理由を聞き納得した。

「か、金づるって…局長、結構酷いですね…」

ただ、その中にある真面目さを垣間見つつ、デュークは探偵局へ戻って行った。

残った恵たち。

「どうする?一人に戻る?」「今戻つたらまずいんじゃないかな」

「ほら、一人に薬が濃縮されちゃって…」「あ、そりゃまずい」「薬は飲みすぎるとやばいもんね」

「それにしてもさすが未来人、薬飲んでからトイレに一度も行かずに済んでるし」「未来って凄いなあ…」「」

「私ってなんでデュークに会ったんだっけ?」「確かふらっと通りかかったからデュークがボコられてて…」「」

「あのときつてなんの用事で通りかかったんだっけか…」「うーん…」
「そういえば、私つてなんで分身できるんだろ…」
「結構私つて謎多いみたいね…」「あれね、なんかラノベの主人公の友人とかに有りがちな設定」「なんかそれで凄い過去持ってたりにしてね」「ありそうありそう!」
(((…私つて、なんなんだろう…)))

…次の日になると、無事腹の痛みもなくなり、トイレに駆け込む事も無くなった。こうして、丸斗探偵局、今回の依頼(?)は解決…したかに見えた。

…しかしあくる日。

「デユ…デュークお願い助けて…」
「嫌です」

「そんな…私の腹痛を取ってくれるくらい楽でしょ…?ね…だから…」

「一斉に涙目になっても無駄です。完治祝いに夜通しクリスマス用のケーキを食べてたらお腹がそうなるのは当然じゃないですか…」
「…うう…デュークのケチ…ぐっ!トイレ!」

「ちょっと私が先よ!」「何よあんたは後でしょ!」「オリジナルの私が先に決まってるじゃない!」「誰がオリジナルですって!?!」
ヤンヤヤンヤ
呆れつつも、いつも通りの賑やかさが戻って一安心のデュークであった。

15・ネコ屋敷を攻略せよ・1 動物病院

探偵局に久しぶりに非常にまともな依頼が入った。

「飼い猫探しか…」

声が小さめで、少々早口な小柄の女性が、自分の飼っている大事な猫を探してほしいと依頼して来たのは昨日の事。特徴などを非常に明確に教えてくれた事もあり、搜索は今日来てから「1時間」で終わってしまった。勿論その裏では、恵の分身術やデュークの時空改変の成果があつたのは言うまでもない。何度もタイムスリップを繰り返し、正確な位置を探知したのち恵数人を使って捕まえると言う形だ。

やはり少々暴れがちな猫を慣れた手つきで抑える恵。服装上あまり動物を載せられないデュークに代わり、連絡を入れた女性の元へ返した。その時の態度は、まるで無くしたと思われた大事な書類を取り戻したかのようにだった。何度も無礼を謝り、礼を言い、そして帰っていく。

：明らかに何かがおかしい。そう感づいていたのは双方とも同じであつた。

この探偵局から少し歩いた所に、近所でも有名な「ネコ屋敷」という建物がある。一人の女性が住んでいるようだが、数年前を境に何かが変わった。近所の野良猫や野良犬、さらにはカラスやスズメなどがこの家の周辺によくたむろするようになったのだ。糞やごみ袋荒らしなどで近くの住宅街ではよく文句を言っているらしいのだが、住んでいる人が誰なのかすらまだ把握していないらしい。警察を呼ぶ事態に発展する可能性も出てきたようだ。

今回貰った名刺の住所は、間違いなくそこだ。誤字が目立つのが気になるが、そこは我らが助手。そんな障害などまったく通用しないのである。やはり彼女はあそこの家の住人である事は間違いないよ。うだ。あの時は余りの慌てようにそこまで気は回っていなかったのだが、あの屋敷で何かが起きているのは確か。もう少し調べてみる事にした。ただ、そのためには自分たちだけだと少々心もとない。今までの相手は人間が多かったのだが、今回は場合によっては動物と対立するかもしれない。プロの助けを得る必要があるだろう、とデュークは言った。ミコの時同様、複雑な顔の恵局長だが、その理由は報酬とはまた違う物があった…。

その翌日。

「お待ちせしました局長、準備完了です」

デュークの掌にある米粒状の小さな物体。それを指ではじくと、あっという間に一枚のDVDディスクへと早変わりした。彼が時空改変で作りだした偵察用の小型マシンである。ただ、局長はどうもお気に召さない様子。それもそうだろう、以前見つけたはぐれ猫が自分たちと出会う直前にノミ状の「マシン」を派遣したのだから。確かに非常に小さい体の中に、「飼い主」の女性に返されてからの一部始終を納めているのは分かる。ただ、何故わざわざ形状までリアルに再現する必要があったのだろうか、少々彼女には理解できなかった。助手曰く、本物っぽくした方が動物相手にはしやすいのだが…。

「やっぱ貴方ゴキブリだ」

「なんでですか局長…」

ともかく、目的地へ行く事にした。以前貰ったフリーパスの期限はまだまだ十分にあるし、回数は無制限なので、久しぶりに清風電鉄を利用する事にした。探偵局から数駅先が、目的地の最寄り駅だ。向かってすぐに看板もあるのですぐに分かる。動物病院、「郷ノ川アニマルクリニック」だ。

近所の人々からも評判の良いこの病院、特に血液など内部の疾患においては最先端を行くと言われている。そんなクリニックの名物と呼ばれているのが、院長の元で働く「熊」のお医者さんこと副院長「月影龍之介」。二人が会いに来た時、院長が留守である事を伝えたのも彼である。

「え、今日会えるって連絡があつたのに」

「す、済まねえだ恵にデューク。なんかセンス、急に会議が入つたみてーで…」

「忙しいみたいですからね…」

そう言いながらも、二人はこの街の人々の順応性の凄さを改めて感じていた。当然だろう、被りものでは無い本物の「熊」が白衣つけて、ネクタイ締めて、青系のジーンズで決めてるといふあまりにも滑稽な姿。しかも流暢に日本語を話している。確かに彼はいわゆる「ミュータント」で、命の危機を院長に助けてもらつて以降医療の道を歩んできた。ただ…やっぱり普通に病院を二足歩行のでかいツキノワグマが服を着て歩いているのはシュールな光景だ。龍之介本人もそこら辺はある程度分かつているようだが。

次の患者が来たと言う事なので、また夜にもう一度お邪魔する事にし、一旦局長と助手は病院を離れた。患者であるウサギを心配そうに見つめる少年に優しく語りかけ、一緒に来ていた母親と親しげに話す龍之介の様子を見た恵は、彼がこの街に順応している理由が分かった気がした。彼が持つのは技能だけでは無い、誰かの信頼を預かり、それを預けてくれた事に対する感謝の念を忘れないと言う心。

一旦外に出た恵とデューク。中にいた時間は十数分だったが、外は既に「夜」となっていた。…勿論、デュークのせいだが。どうせ夜まで待っているのも致し方ない、と言う事で少し未来へとタイムスリップし、お邪魔する事にしたのである。今は病院は緊急用件以外は受け入れていない形だが、約束している旨を看護師の人に伝えた所、あっさりとする事が出来た。双方とも信頼を置いている仲というのがあるらしい。本日の夜勤担当は、院長のようだ。

「よう、メグちゃんにデューク。昼は悪かったな」

「メグちゃんはないでしょ、おじさん」

「へへ、売り言葉に買い言葉、か。デュークも相変わらず決まってる衣装だな」

「ありがとうございます。そしてお久しぶりです、郷ノ川院長」

顎ひげを生やし、茶色の地毛はオールバック。見た目は少々強面だが、その屈託のない笑顔はいたずらっぽさと優しさに満ちている。彼こそ、「郷ノ川アニマルクリニック」の院長、「郷ノ川仁くごうのかわ・じん」である。

「よせよ、仁さんで良いんだぜ。ただし、おじさんは余計だけどな」

「えー…むう…」

恵たちより年上かつ大柄な彼。ラテン系の血も混ざっているらしい。かなり以前、まだ探偵局を開設していない頃から二人は彼にお世話になっていた。動物病院としての一面もあるこの病院だが、裏で彼らのような特殊能力を持つ人々の治療にも携わっている。タイムスリップによって三半神経などに狂いが生じる時空酔いにかかり、ダウンしてしまった恵を見つけ、治療したのが彼であった。デュークもあのナノマシンの不調の後、彼に検査を依頼したという。何故そ

のような凄まじい力を持っているかは、デュークですらまだ全容が掴めていない何かがあるらしい。油断ならない相手だが、確かな事がある。彼は有能な医者であると言つ事だ。

最初会つた時、仁は一瞬で二人の能力を見抜いた。それゆえ、一時デュークから敵視されてしまった事がある。ただ、その隙に襲いかかって来た未来からの犯罪者相手に共闘し、見事捕らえた事で、今や二人の良き相談役ともなっている。

「で、これがその…」

「そ、例のネコ屋敷の一件」

彼に手渡ししたのは、あの時デュークが録画したネコ屋敷の様子が入ったDVD。動物に関わる仁としても見逃せない内容であった。

そして、院長室で映像が流れ始めた。それを見るや否や、飄々としていた顔が変わった。

映し出されていたのは、小綺麗な部屋の一角。そこで寝転がる猫たちの元をゆっくりと一人の人間が通る。先程の女性のようなだが、手には何か山盛りになっている。良く観なくても、だいたい分かった。いわゆる「猫まんま」である。テーブルの上に置くと、そこに多数の猫が群がり、我先に頂く。食べ方はどれも非常に汚く、あつという間にバランスは崩れて床に御飯が飛び散ってしまった。だがそれらも後からやって来た猫たちによって食べられるので、そこまですで床は汚れない様子。…猫の毛による汚れは別だが。女性はその間、その様子をにこやかに見守っていた。

…ここで恵からストップがあつた。一見すると、猫を大事に思うあまり自分すら犠牲にしている典型的なネコ屋敷の持ち主ようだがそこは探偵、局長は何かに感じていた。勿論、向かいの席に座っている院長も。

ここで再びデュークの本領発揮。試しに猫まんまの中身を少々猫た

ちの口に合わないように改変してみると、思っていた通りの反応が起きた。一口食べた途端に猫たちは口アから吐き出し、女性向けに怒りの声を上げ始める。中には爪で服を引っかき始めるものまで現れ始めた。当然女性の服はそのせいでボロボロだ。そして、怯えながら食べ物を外に捨て、もう一度台所へ戻っていった。ノミ型マシンは、そのあと図々しく女性の傍で鳴き続けるネコの様子を映している。さすがにこれは可哀想なので、埋め合わせで作り返しの猫まんまを美味しくさせてあげたのは言うまでもない。そして、外に捨てられた残飯は、夜が開ける頃にカラスやスズメたちによって食べられた事が、猫の視線からもはっきり見て取れた。

…これ以上再生する必要はない。仁はそう言い切った。今回の解決すべき事項は、間違いなくネコではない、女性の方だ。普通はネコと人間と言うのは人間が優位の立場にい続ける事が友好を築く重要な部分だ。頼もしい仲間：ちょうどデュークに対する恵のような存在。どんなに力が強くても、いないとどこか落ち着かない。そういう関係こそ、理想的なペットだというのが郷ノ川院長の考えだったが、先程のネコ屋敷は明らかに違う。人間とネコの立場が逆転しているのだ。

「こき使う側が、逆にこき使われてる…っていう事か…」
「そ。それに、今回はちょっと深刻なようだぜ」

普通このような逆転が起こっていても、傍目には普通のネコ大好き人間にしか見えない。気付かない間にネコとの主従関係が逆転し、ネコのために生活リズムを組むようになってしまっている。だが、今回は余りにも露骨だ。まるで主人が仲間と共に配下をこき使っているように見える。知識を持つ者がうぬぼれた時、誰かの上に立った時、必ずと言っていいほど経験する現象だ。

「と言う事は、黒幕は…」

「ああ、デューク。間違いないぜ、ミュータントだ」

自分が助けた月影龍之介のように、慈愛に満ちたミュータントというのは少ないと言う。そもそも彼も、もし仁に罠から救い出されていなければそのまま復讐心のまま暴れ狂う怪物であつただろう。今回も、ネコのリーダーと思われる存在が自らの欲望のままに暴れ狂っている。恵やデュークが、そのような事項を持ちこんだ事を仁は大いに感謝した。久しぶりに、自らの持つ「能力」を活かす事が出来るからである。龍之介を除き、絶対誰にも見せる事が出来ない理由を、苦笑いの恵は知っていた。

「…あれ、また使うの…？」

「ちよつとだけ、な。大丈夫、あのときみたいな事はしねえから」

そう、あの時。決め技に欠けたデュークの間を突いて犯罪者が襲いかかろうとした時、その脳の働きが突然停止した。体の節から一気に体力が奪われる気がした。

その時、恐らく彼の視界に入ったのは目を覆いたくなる光景である。腕に食らいついた色とりどりの無数の…。

『俺のダチ公、相当お前から血を吸いたかつたようだぜ』

…あ、悪い悪い…やっぱ女の子だもんな、ヒルが苦手なのはしよ
うがないぜ』

…郷ノ川仁、本名郷ノ川・ウェイバー（W）・仁。ヒルを相棒とし、
様々な生物の体を通る体液を我が者にする戦う医者である。

「…あのー、私役私たちなんですけどね…」

「だ、大丈夫だって、次回は思いっきり活躍させてあげるからさ」

「局長…出番までとことんがめついですね…」

ともかく、作戦会議は始まった。

決行は、仁の時間が空いている数日後の夜。

15・ネコ屋敷を攻略せよ・1 ㄱ動物病院ㄱ(後書き)

補足

今回から登場します「郷ノ川・W・仁」及び「月影龍之介」に関しては、pixivにて詳細を投稿しております。詳しくは筆者のマイページにありますリンクよりご参照ください。

16・ネコ屋敷を攻略せよ・2 〈囃作戦〉

朝。住宅街を一匹の猫がしゃなりと歩いていった。静かに見えるこの街も、欲見ると通学中の学生や通勤に出かける人々、そしてゴミ捨てに出る人たちで結構外は賑わっている。

そんな中で、やはり例の「ネコ屋敷」の方を見て顔をしかめる人は多かった。白い毛並みが美しい猫の隣を、警官が動き出している様子も見て取れる。やはり警察への苦情も多かったようだ。ふんわりとしたその青い髪の後ろ姿は一見すると女性警官のようだが、「猫」の鼻は「彼」が男である事を告げていた。…ただ、それは今回の目的の本筋と外れているのは言うまでもない。

「局長：性別はどうでもいいじゃないですか…」

「えー、だって気になるもん」

探偵局は珍しく朝から賑わっていた。いつもの二人に加え、動物病院から仁と龍之介のコンビもお邪魔していた。勿論朝が苦手な恵がそんなに早く起きていられる訳が無い。今ここにいるのは、昨日の夜に打ち合わせが済んだ4人。本来の4人、すなわち任務が終了した皆は今頃寝ていたりそれぞれの仕事に戻っているだろう。念のためデュークが未来の自分に確認したところ、全員すっかり戻れた事を知った。恐らく任務も上手くいくだろう。ちよつとだけ未来の自分が普段より嬉しそだったのは気になったのだが、そこは内緒にもらった。未来を知っては面白くないからである。

さて、今彼らが見ているのはパソコンのモニター。先程の「猫」の見た景色が鮮明に映し出されている。そう、あの猫はデュークが自らの長髪一本から製造した精密な「ロボット」なのである。このままネコ屋敷に潜入し、あわよくばそのまま主犯を御用にしようという計画だ。

猫の見る目線で、各地のゴミを烏が漁っている様子や野良猫たちがだらけている風景が見て取れる。ツキノワグマの龍之介曰く、犬がないのは恐らく彼らは近くの山で寝泊まりしているのだからこの事。

今回の計画の発案者はデュークなのだが、動物とよく触れ合っている仁は心配がぬぐえない。油断は大敵、と言う事で彼に自らの持つ動物の体臭の情報をインプットさせ、ロボットの猫は外見上解剖しない限りは完全に野生の猫と区別がつかないようにしていた。ただ、それでも…

「大丈夫です、僕たちに任せてください。探偵ですから」

「…ま、奥の手も考えてあるだろ？あれ」

「うん、あまり乗り気じゃないんだけどね…」

「お、オラは気にしなくていいべさ。悪いの退治だべ？」

龍之介はそういうものの、正直、猫や犬などにこの手を使いたくはない。ただ、場合が場合の時…。

そうこう言う間に、ロボット猫はネコ屋敷に着いた。各地から猫やカラス、スズメが朝から集まっている。こんなに鳴き声がうるさいと、確かに苦情も相次ぐだろう。扉も開いたまま、寒いのに大丈夫だろうかと中に入ると、以前出会った例の女性の方が食事を用意していた。その横で…。

「相変わらず図々しい態度ね…」

「せっかく食事を作ってもらっているのに、ありがたみを全く感じてないですね」

ぐうたらで横暴な態度を取る猫や犬たちの前でも、女性は笑顔を隠

さずに料理をふるまっている。汚く食べる動物たちに、明らかにデュークは敵意を向けていた。そんな彼を、龍之介が優しく諭した。確かに未来人にとっては人間至上主義は重要かもしれない。ただ、動物を舐めてはいけない、と。

料理が終わわり、片づけの時間。相変わらず洗っている女性にちよっかいを出そうとしている猫たちがいた。しかし、以前見た場合と状況が違っていた。彼らに怒るかのように、大きく勇ましい猫の声が響いたのだ。それに気付き、怯え足でそちらの方に向かう猫たち。

「ロボット」の猫もそちらへ向かっていくと、そこにいたのは…

「黒…猫？」

全身真っ黒、しかし背中の部分だけは灰色。そして黄色の目は、無礼を働いた猫を厳しく睨みつけていた。まるで怒ったように彼らに向けて鳴き続けているその声。念のためにデュークに翻訳してもらくと、女性へ対する暴行を怒鳴りつけているようだった。危害を加えるなど言っただけ、とも。

まるで人間のような考えの持ち主…するとやはり？

「あいつがボスね…」

噂の「ミュータント」。何かしらの特殊な能力を身につけている場合が多い、油断ならない相手。そんな「彼」を、他の猫たちは「親分」と呼んでいる事も分かって来た。このネコ屋敷をネコたちで占拠した張本人だと言う事も。

所詮人間などネコや犬たちに支配される運命だ。放置しておいても人間は自分たちを可愛がってくれるし、餌もくれる。いずれこの家もこのような状態になる。机の上に乗る、誇らしげに語る「親分」。ある意味心理を突いている、と恵は思った。可愛いは正義、という言葉通り、大半の人間は可愛いものに目が無い。しかし、それを

もし「可愛い側」が利用されたら…。ますますあの女性の事が心配になって来たのは言うまでもない。

その時、何かがおかしい事に龍之介が気付いた。猫たちの様子が変なのだ。リーダー格の黒猫に、スパイの匂いをまんべんなく嗅がれる。デュークによつて通常の猫と同様のコーディングをされたスパイは、その直後、「偽者」だと暴かれてしまった。彼にとつても予想外の事態、急いで撤退させようとするも一時道はチェイス状態となつてしまった。数匹のネコやカラスに追われ、何とか角に曲がつて消滅させる事に成功した。

自分の時空改変の能力が、ネコに暴かれてしまった。一体どういう事か、尋ねるデュークに仁は言った。これが、「奴」の力だ、と。

まだ推測にすぎないが、恐らくあのリーダー格の猫は時空を超え、「存在」そのものを嗅ぎ分ける事が出来るのかもしれない。頭脳のみならず、ミュータントというのは時たま普通の生物以上の力を持つ事がある。動物だからと甘く見ていた事を、動物に関わるプロに突かれてしまった。

ともかく作戦変更、こうなれば直接乗り込むべき、という恵だがデュークや仁は乗り気ではなかった。相手に警戒されてしまった以上、もっと作戦を練る必要がある、と。しかし、それは不可能だった。だったら奥の手は…という時に龍之介が動物の勘で真つ先に異変に気がついた。そして、残りの三人もようやく窓の周りに集まるカラスやスズメたちの群れを目の当たりにした。

あの猫は、ネコ屋敷の周辺のみならずこの街の様々な動物の長。あの時聞いた言葉は嘘では無かつたようだ。こうなれば強行突破しかない。

「デューク…」

「局長、申し訳ありません。どうやら僕は油断していたようです…」

真剣な目をするデューク。彼の眼を見て、局長は決心した。

「分かったわ。奥の手を使いましょう」

17・ネコ屋敷を攻略せよ・3　　〈開幕！？ネコ裁判〉

ん…カラス部隊からの報告？ちよつと待つニヤ…。

侵入者は追ひ払われたニヤ？まあ当然だニヤ、この俺の軍団に勝てるわけがないニヤ。所詮人間、この街のだいたいの動物は俺の子分みたいなもんだし、敵う訳がないニヤ。

それにしても、さっきのネコの…えーと、こういつ時って…う、うるさいニヤ！スパイくらい人間の捨てた雑誌で読んで知ってるつつーニヤ！こつちも油断してたかもしれないニヤ…。あの女が呼んで来たのかニヤ…いや、それは無さそうだニヤ。そもそもあの女、俺たちがいニヤきゃ今頃行き倒れてたわけだし、逆らえるわけニヤいよなー。いつでも美味しい飯作ってくれるわけだし。

…そんな事言ってる間に、気付いたらもうだいぶ明るいニヤ…。ふああ、さて、ちよつと寝る事に…ん、なんか首元に変なのがくっついて…

んああ…なんかふニヤーつとして…ふあああ…

||||||||||||||||||||

…ん…良く寝…ってアレ？こっつてどっ…

ん！？これってもしかして、人間たちの言う鉄格子！？ちよ、なんでだニヤ！おいその人間！説明しろだニヤ！

「あ、ようやく起きたみたいね」

ニヤんだおいそのメス人間！さっさとここから出すニヤ！って手

に持ってるのって…いてっ！！

「五月蠅いわね、さつきからニャンニャン鳴いて。囚猫なんだから少しは静かにしなさいよ」

ひっ、ま、まさかこれって人間の言うむ、ムチ…ちよ、どうなってるんだニヤ…。

「全く…あの家の強制執行でこんなに罪猫がいるとはね…」

「お待たせー」

「あ、お待たせ。どう、次の裁判」

もう一人人間が…ん？あれ、なんか変だニヤ…。顔も同じなら姿も同じ…。

「あれはもう駄目ね、あんなに人里で暴れたんじゃ」

「死刑決定、か」

「うんうん」

え、もう一人…三人も…ってあれ、どうなってるニヤ…ってうわ、凄い声…これが噂で言うツキノワグマの鳴き声かニヤ！？

ひええ…ここはつまり動物の刑務所…ってちよっと待つニヤ！俺が何悪い事したんだニヤ！

「さつきから五月蠅いわねあそこの猫…」

「どうしたんだろう」

「きつとお腹がすいてるのよ」「なんだ、そうか」

「…あはははは」「…」

なにのんきに笑ってるニヤ！くそー、早くここから出すニヤ！この

このこの…ってあ、あれ…体が宙に…

「あまり暴れちゃ駄目よ、囚猫の癖に」

…フニヤ！？え、さ、さつき外にいたはずなのに…匂いも同じ…

「そうか、貴方が次の被告猫ね」

え、もう一人！？匂い…同じ！？ど、どうなって…

つてちよつと、俺をどこへ連れて行く気だニヤ！早く離すニヤ！離
s…

ギニヤー！…ど、どうなってるニヤ！？牢屋に入れてあるの、全部
俺の子分ばかりじゃニヤいか！本当に皆捕まってしまったんだニヤ
！？ちゃんと説明…

「」「相変わらず五月蠅いわね、この猫」「」

「」「そんなのよ、さつきからずーつと」「」

…オナジニオイガムツツ…ポカーン…

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「只今より、第4928回、動物裁判を始めます。被告…猫は前に」

ひ、被告猫ってニヤんだ…だから悪い事なんて一つも…

え…どうなってるニヤ…裁判官…でいいのかニヤ…それ以外全員同
じメスの人間じゃニヤいか…。こんな事、ぶつちゃけありえニヤい
…。

「罪状を述べます。この「親分」と呼ばれる猫…こちらでは被告と呼びますが、彼はここ数年の間、一人の人間の女性を監禁し続け、虐待してきた疑いがあります」

ちよ、それってつまり俺が悪いつて言ってるのと同じじゃニヤいか！ウソツキもいい所だニヤー！いいからこの縄を外して自由に…

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

静粛に！

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

…ひ、ひい…同じ声で怒られると怖いニヤ…しゅん…

「それでは、証言者の方どうぞ」

「はい、あの猫は私たち人間をずっと舐め切った態度で見えていました。可愛いから自分たちを決して捨てる事は無いだろうと」

…にゃ、ニヤんでその事を…

「それなのに、あの猫はそれに対して虐待する事、利用する事ばかり考えていて、それに対する見返りは無きに等しいものでした」

ちよつと待つニヤ…でも俺はあの人間をあそこに住まわせて…

「確かに彼は女性を家に住まわせていたと言う反論があります。し

かし、それを踏まえても横暴な態度を考えるべきではないでしょうか」

お…横暴…俺のどこが…

「いつも美味しいご飯を作ってくれていると言う感謝の念。家に入れてくれる感謝の念。それを一切考えていなかったと言えます」

感謝…人間で言うありがとうかニヤ…

「このような猫をこのまま放置しておくわけにはいきません」

!?

「…」「裁判長、私たちは彼に有罪の判決を望みます」「…」

え、ちよ、ちよっと待つニヤ…俺がゆるぎない…ということは死刑!?

「有罪!」「有罪!」

待つてくれだニヤ…俺が…俺が悪かったニヤ…

「有罪!」「有罪!」「有罪!」「有罪!」

ひい…待つニヤ…お願いだから…

「有罪!」「有罪!」「有罪!」「有罪!」「有罪!」「有罪!」

ご…ごめんニヤさい…お、俺が悪かったニヤ…

「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」
「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」
「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」
「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」
「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」
「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」
「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」
「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」
「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」
「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」 「有罪！」

う…ニヤアアアアアア！！

「静粛に！！！！」

…判決を言い渡します」

…もう駄目だニヤ…皆捕まってしまったし、俺があんな事したせいで、もう皆死刑になっちゃうニヤ…。
それに、あの人間にも、なんにも恩返しできてニヤかったし…

「判決は…」

さよならだニヤ…。

「無罪です。」

…ふえ？

「そ、貴方は無罪。死ぬ事もないし、罪も背負われない」

…え、あ、あれ…

「局長…もう少し裁判の様子を再現してください…あれはちやちす
ぎますよ…」

「えー、余りやり過ぎると後々大変なのに…親分、大丈夫？」

さっきまでの建物じゃない…家の中？

一体どうなってるんだニヤ…

事の次第はこうだ。

あの時、ロボット猫の正体を突かれ、その発信源まで特定されてしまった恵たち。その彼らを、カラスたちが襲いかかって来た。「親分」の言うとおり、確かにカラスたちは上手く襲いかかり、彼らを一旦は退けた。ように見えた。だが、デュークが猫側を舐めてかかっていったように、親分側も完全に舐めていた。例え偽者と本物の區別が出来ても、本物が操られている場合それを見破る事は出来なかったようだ。カラスは見事デュークの時空改変…という名の洗脳に引っかけり、嘘の報告をした。そして安心しきったのが運の尽きだったのだ。位相を変える…つまり、次元的に透明になった4人が侵入したのを、全く見抜けなかったのだ。能力は凄いがいざ油断をするととことん駄目なのが親分の欠点のようだ。首元の異様な感覚は、仁の「ダチ」であるヒルが吸いついた証。催眠物質を満載したヒルたちが、家中を我が物顔で動き回っていた猫や犬、その他動物たちに食らいつき、そのまま夢の世界へいざなったのである。

そこからは、丸斗探偵局の腕の見せ所。デュークが創りだした牢屋や裁判所を基に、恵局長と共に「裁判」を展開、彼らがどんな悪い事を行ったのかを改めて知らせ、彼らを反省させた。なお、他の子分たちも同じように「裁判」をさせられたらしく、元の屋敷に戻って来た親分の前で揃ってうなだれている表情を見せていた。

しかし、あの時非常に怖いように見えた二人の人間　デューク裁判長と恵検察官　の顔は、全く怒っていなかった。一瞬拍子抜けしながらも、啞然として見続ける「親分」。

「僕の方こそ、君に謝らないといけない」

デュークは猫に言った。口に出した言葉は、自然と親分の方にも聞こえているようだ。勿論、恵は時空改変だと見抜いているが。

「君と同じ過ちを、僕もするところだったからね。もしあのまま放置しておいたら、僕はそのまま君を…」

「デューク、その辺にしておきなさい」

「あ…すみません。…君と同じ、僕も猫たちを舐めてかかっていた。お互いさまさ」

突然謝られて、ポカンとする「親分」。抽象的であったデュークの言葉を、恵はより分かりやすく説明した。あの時、自分たちは本当に猫や犬たちを「有罪」と認定する所だった、と。しかし、それを止める言葉があった。親分が人間を愚かな生物だと見下していたように、自分たちも「親分」や仲間たちを単なる悪者だとばかり思っていたという。

「ごめんね…いや、謝らなきゃいけないのは…貴方達だけじゃないかもね」

そう言い、恵が見た先には、白衣に身を包んだ茶髪の男性と、直立歩行で服を着こなす熊に抱きかかえられた一人の女性の姿があった。

「メグちゃん、随分派手にやったみたいだなー、みんな威勢がぜんぜんねえぜ」

「ちよつとね…あ、本当にすみませんでした…」

「いいえ、だいじょうぶです。わたしは…」

そう、あの女性である。デュークや恵が「裁判」にいそしんでいる間、残りの二人は女性から詳しい話を聞いていた。念のために、分

身体であるもう一人の恵と連絡係としてもう一人のデュークも連れて。

そもそもこの家を見つけてくれたのが「親分」であった事を知った時、さすがの医者たちも少し驚いた表情を見せた。昔いた家で苛められ続け、必死の思いで脱走した彼女。しかし、行くあては当然なく、路頭を彷徨っていたと言う。そんな中、出会ったのは猫たちであった。以前恵たちが調べた段階では人が住んでいたという話もあったが、実際の所ずっと空き家だったようで、あくまでネコ屋敷には書類上しか住人はいなかったという。そんな中で、猫たちに連れられてその家に住み始めた女性。だが、その住み心地の良さから、次第に猫たち、またその猫のボスである「親分」の態度は横暴になつて来たというのだ。

やはり、裁判の結果は「有罪」にすべき。そう他の自分たちに連絡しようとした恵とデュークだったのだが…

「でも、うれしいです」

猫や犬たちは確かに怖いし、我がままな所もある。でも、昔のように自分の存在そのものを傷つけるような事は決してせず、彼女の存在を認めたくえで接してくれていた。だから、この家はずっと「ネコ屋敷」でいられたのだ。彼女の話す内容を聞いて、探偵の二人と医者二人は全てを理解した。あの猫たちは悪者では無い、道を踏み外しかけた存在だ。

「ねこちゃんにわんちゃん、よかったね」

笑顔で彼らを迎える女性。しかし、どこか皆困っているような表情だった。それもそうだろう、今まで虐げてきた事に対する苦悩があるからだ。特に、どこか「親分」は何かを伝えようとするも伝えられない様子だった。必死で鳴き声を上げる様子を見て、デュークは

何かに気付いた。

「あの…龍之介さん、ちょっと頭を貸していただいても…」

「え、え？どういう事だべ？…べつにいいけどさ…」

龍之介の顔が近づいたところで、デュークはその額に指を当てた。何かが移動したような感触を龍之介が受けた直後、デュークの空いた方の腕に赤い首輪が現れた。そのサイズは小さく、犬には合わない長さだ。これを見て、仁はデュークが何をしたいのか察知した。そして、その首輪を「親分」に取り付けると…

「…ニヤ…ニヤだ…聞こえニヤいか…ってあれ？」

「え、しゃべった…！」

「なるほど…翻訳機か、デューク」

「はい、龍之介さんの動物の知識を少々拝借いたしました」

相変わらず何でもありなデュークの力は、猫の言葉を人間の言葉に翻訳してしまう首輪まで創りだしてしまっただ。さすがの恵も久しぶりに驚いた。やりたい放題とはこのことである。一方、ついに女性と言葉が通じるようになった親分だが、余りにも突然の事で何を言い出そうか戸惑っている様子であった。それに、目の前にいる女性に、何も恩返しが出来ていない。そんな自分が、話せるわけがない…。そう思った時、彼の体は宙に浮かび、女性の体に抑えられた。乱暴な形ではなく、純粹な愛情をあらわすものとして。

「ありがとう、ねこちゃん。ずっといてくれて」

その言葉に、泣きながら謝罪を繰り返す「親分」と、周りの動物たち。しかし、女性は全てを許していた。彼らがいてくれる事こそ、

立派な恩返しだったのだ。

今回の依頼は、完全なる誤算。さすがの恵も、今回ばかりは何も請求する気になれなかった。むしろ、たっぷり報酬を貰った形だ。新たな信頼関係の設立の瞬間と言う貴重な目撃例という。

「そういえばメグちゃん…ずっと聞いてなかったんだけどよ、あの女性の名前、なんだっけ？」

「あらら…そういえば名乗ってなかったわねあの人…『美紀^{みき}』さん、だって」

なるほど、と仁は思った。このような動物たちをまとめる、確かに巨木の「幹」だ、と。

時空改変で警察などの捜査は無かった事になり、動物たちももう近くの住人の迷惑になるような事はしない、と誓った。これで今回の件は落着…かに思えた。

仁や龍之介は先に病院に帰還し、動物たちが美紀さんの許可の上で改めてくつろぎ始めている中で、恵はある事に気がついた。「親分」がいなくなっていたのだ。デュークを引き連れ、外へ出た彼女はすぐに「彼」を見つける事が出来た。赤い首輪は、黒い体に非常に目立つのである。

どこへ行くのか、という問いに親分は人間の言葉で答えた。この街を去る、と。例えデュークらの陰謀とはいえ、彼らを危ない目にあわせてしまったのは自分。動物たちにも既に今までの集団は解散している事を告げているという。親分失格だ、そう言い残し、去ろうとした一匹の猫に、恵は言った。

「…ねえ、私たちと一緒にいる気はない？」

「…え!?!」

「ブランチ…ですかニヤ…」

「そ、今日から貴方はブランチよ」

あの時、デュークの戦法を完全に見切ったのを見て、恵はある事を考えていた。確かに敵に回すと恐ろしい、だがもし味方に回ったら…？

最初に考えた時はまだ彼がどのような事を考えているかまで回らず、あくまで卓上論に過ぎなかった。しかし、彼らの行いを知るにつれ、それは次第に現実めいたものへと変わり始めていたのである。デューク本人も最初は驚いていたが、局長の考えと同じようなものを持つていた事を、彼も否定しなかった。それに、彼自身にも少々思いがあった。未来の超科学を打ち破った、野生の力というものに。

親分の名前を捨てた彼には、恵から新しい名前が授けられた。

「ブランチって、確か枝っていう意味ですよね」

「え…えだ？それが、人間だとブランチって…」

「別の動物の言葉みたいなものよ」

美紀さんの元で暮らしていた猫という事で恵が真つ先に思いついた名前。それに、デュークがいくつかの意味を付け足してくれた。

あの日、確かに彼は「親分」ではなくなった。しかし、それはすなわち信頼をも消し去ってしまった事では無い。彼に従い、尊敬していた動物たちとの関係は今後とも続くであろう事を、その後ネコ屋敷を訪れた二人は知った。この巨大な人（動物）脈を持つ彼は、まるで一つの巨大な枝のようだ。様々な小枝を束ねる、小さくとも頑丈な一本の枝。そしてもう一つ、ミュータント故に持つその卓越した頭脳からも。脳細胞が網の目のように発達した彼にこそ、この名

前がふさわしいだろう。新しい仲間が増える事は、なんだかんだでデュークも嬉しかったようだ。

「よくわからニヤいけど…なんかかつこいいですニヤ！」

彼の眼を覚ましてくれた二人の「恩人」、恵とデュークには、親分…いや、「ブランチ」は敬語で話す癖がついてしまったようだ。

「それじゃ、今日から三人体制、よろしくお願いね」

「了解です、恵局長」

「同じくですニヤ！」

丸斗探偵局に、新しいメンバーが加わった。

真実を見極める鼻と、大規模な動物脈、そして卓越した頭脳を持つ、天才猫である。

19・聖夜は再び 前編

前回より新たな仲間ランチが加わり、少しだけ賑やかになった丸斗探偵局。しかし、増えたのは人数だけ、雰囲気はいつも通りのようである。今日も今日とて暖房のきいた部屋でだらけている惠局長、こたつもないのに丸くなって寝ているランチを尻目に、様々な文献を読み、勉強を続けているデューク。

「デューク…読まなくても時空改変で覚えりゃいいんじゃないの？」
「そうしたらつまらないじゃないですか」

ほぼ万能の彼にとっては、逆にそれが退屈さを生み出す要因となる。学ぶ過程、不完全なものを完全に近づける段階を経る楽しさを、毎日味わっているのである。ただ、毎日色んな事で悩む惠やランチにとってはかなりの贅沢な悩みにしか聞こえないのだが…。

「時々デュークの事が分からなくなるのよね…」

ふと、惠は掛け時計に視線を置いた。その途端、慌てた様子で急に立ち上がり、机に乱雑に置かれた雑誌群を急いで片づけ始めた。どうしたのかと慌てるランチだが、デュークは大丈夫だ、と言う目を返す。実は、昨晚に予約が入っていた事を今の今まで局長はすっかり忘れていたのだ。ある意味自業自得と言う事でデュークは手伝わず、数人に分身した惠が焦っている様子を呆れ顔で眺めていた。なんとか依頼人が来るまでには片づけることに成功したようである…。

「この人を…探してほしい、と」

依頼人は、見た目からして西洋風の顔の男性。身長が高いはずのデュークよりも大きく見えるのは、厚い服を着こなしても分かるその肉体のせいであろう。茶髪に橙色のセーターと、少々派手な服装であるが。そんな依頼人が出したのは、一枚の写真であった。同じような髪の色をしているが、彼とは違いかなりの痩せ型の男性である。

「数日前から行方が分からなくなっていているんです」
「なるほど…」

彼を含めた仲間と共に一仕事を終えて一夜明けの時、彼の姿が忽然と消えていたと言う。勿論自分たちでもあちこちを回って見たのだがそれでも行方を掴む事は出来なかった。そんな中でどうしてこの街だと推測したのか、というデュークの問いに男は答えた。各地を回る彼らの仕事、最後に回った街がここなのだ。ただ、恵としてはそれだけで決められるのはどこか腑に落ちない所がある。しかし、悩んでいる人を見過ごすわけにはいかない。

「分かりました、依頼を引き受けましょう」

深々と頭を下げた後に依頼人が帰ろうとした時、その足を止めるものがあつた。

「こ、こらブランチ！」

鳴きながらすり寄る黒猫をこちらに引き寄せ、無礼を謝りつつブランチの頭をこづく恵。しかし、依頼人はあまり気にしていないようであつた。ウインクまで返す余裕まであつたのだから…。

|||||

「依頼人の方の名前はプランサーさん、探し人の名前は…読みにくいわねこれ…」

「プレッツェンさん、北欧やドイツ系の名前ですね。そしてこれが住所…」

「読みにくい文字ばかりですニヤ…」

ランチも交え、丸斗探偵局の作戦会議が始まった。住所を見てランチや恵が頭を抱える通り、やはり彼…プランサーは海外からの訪問者であった。そして、現在分かっている状況とえば、夜に消えた、プレッツェンは寂しがり屋、そんな事ばかり。ちよつと少なすぎる気がするが、そこは丸斗探偵局。わざわざ自分たちを選んでくれたのだ、全力で挑む以外に選択肢はない。

「ちよつと、お願いできる？」

「分かりました、お任せ下さい」

そうやって彼の姿がソファから消えた直後、ランチの近くに再びデュークが姿を現した。だいぶ慣れたとはいえ、やはり突然誰かが気配もなく現れるというのは驚くものだ。時を飛び越え、依頼人の動きを観察していたのである。いつもならこれでだいたい状況は分かる。しかし、今回は違った。時空改変と言う力で森羅万象を制御できるはずのデュークが、対象を見失ってしまったと言うのだ。

「それってどういう事!？」

「すみません…ちよつとフィンランド付近まで行き当たったのですが、それ以前の追跡は出来ませんでした…」

…それを聞いて、恵にはある節が思い当たった。その時間を聞き、それはある程度の確信へと変わった。「ある程度」というのは、誰もその存在を実際に目撃した事が無いからである。デュークとブラ

ンチに、この事を尋ねてみた。

「ねえ、サンタクローズって知ってる？」

「「え？」」

サンタクローズ。12月24日に世界中の子供たちの家を回り、良い子たちにプレゼントを渡す不思議な老人。仲間の9頭のトナカイにそりを引っ張ってもらい、一晩で世界中を駆け巡るという。勿論、これは空想の存在である事は恵も知っている。しかし、この探偵局にはそのような「絶対」は存在しにくいという実情もある。

「可能性が完全に否定されない限り、いないとは言い切れませんね」「そうなのよね…」

その考えをより確信へと導いたのは、ブランチの証言であった。彼の「鼻」は非常によく利き、例えどんな手段を使っても何でも嗅ぎ分けてしまう凄い能力を持っている。そんな彼が、あの男性から人間の匂いがしなかったと言えれば信用しない訳にはいかない。ただし、悪い匂いではなくむしろどこか爽やかで、一仕事を終えたような感じで会ったと言う。もしかして、あのプランサーとかいう男がサンタクローズなのか。まだ確証はないが、それも視野に作戦会議を進める事にした。

「それにしても、サンタクローズか…」

まさか年の瀬になって、彼の名前が出てくるとは思わなかった。そんな恵に対し、デュークはどこか子供っぽい顔をしていた。サンタクローズという存在を、聞いた事が無かったようだ。

以前デュークから、未来には妖怪をはじめとする超常的存在は根こそぎ絶滅させらえているという事を聞いた事がある。と言う事は、

サンタクロースやクリスマス自体も消えているのではないか。そんな恵の問いだ、彼は答えを言わなかった。あまり未来の事…自分が「過去」いた世界の事はあまり話したくない、という。局長もこれ以上は聞かなかつた。彼女もあまり過去を振り返らない性分、他人に嫌な事を押しつけるのは良くない、と。

「…あのー、でしたら毎回の面倒事を僕に任せるのは…」

「それは別問題」

「即答ですね局長…」

一方のブランチは、少々落ち込んでいた。そんな人物がいるならもっと良い猫でいるべきであつた、と年が変わる今頃になって反省している。来年もあるから大丈夫だ、と励ます恵の方は十分その権利があると言い張っている。確かに悪い奴をやっつけたり困っている人を助けたりはしているが…。

「恵さんはいつつもさぼってばっかじゃニヤいですか、だから今年も来なかつたんだニヤ？」

「何言つてるのよ、サンタクロースは子供のための存在なんだから来ないのは当たり前だつて」

大人が楽しむのは良いが、図々しく割り込むのはもつてのほか、というのが彼女の持論であつた。

一方のデュークは、笑顔は崩さなかつたものの、サンタからのプレゼントを貰う権利は自分には無い、と言つた。かつて彼が引き起こした様々な犯罪が、今も重い鎖となつていようだ。彼の秘密をその口から聞いたブランチも、その事をよく分かつていた。自分は確かに色んな悪い事をやって来たが、正直彼と比較すると雀の涙、猫の額ほどのレベルだ。だから今、きつところやって正義の味方としてその分を償っているのかもしれない、と彼は思つた。ちようど自

分のように。

そして、今回の作戦の方もそろそろ決まり始めていた。デュークの追跡により、この街のどこかにいるのは確かである事は分かった。しかし、これだけ分かれば十分だ。ブランチの嗅ぎつけた匂いの元さえ辿っていけば、確実に見つかるであろう。ただ、彼がもしサンタの関係者であれば、恵やブランチだけでは追跡は不可能かもしれない、という事も考え、デュークも捜索に向かう事にした。のだが。

「はあ！？留守番！？」

「だ…だっってお外は寒いニヤ…」

ここに来てブランチが我儘を言いだした。せつかく本物のサンタに会えそうな機会なのに突然弱音を吐き始めた彼に納得いかない恵だが、一度丸まった猫はなかなか元に戻らない。仕方ない、と言う事でデュークが一時的にブランチの能力をコピーし、使用する事にした。あくまで期間限定なので劣化版だが、それでも匂いすら分かれば十分だ、という判断である。

念のため、もう一人留守番としてデュークを配置した後、「二人」は一路冬の街へ飛びだした。窓からその様子を見る留守番係のデュークの眼下で、「2人1組」の影は2組、4組、8組と次々に増えていく。人海戦術で根こそぎ探すという作戦だ。

匂い以外にも、写真を使った聞き込み、周りの探索など様々な手段を使って探したものの、どの局長や助手も探し人「ブリッツェン」を見つけない事が出来なかった。しかし、ブランチの能力では間違いないこの街にいる、という事が分かっている。

「でも…どこにいるか全然…」

寒くなってきたし、諦めて帰ろう。そう恵たちがデュークたちに言おうとした時。彼の耳が、何かを捉えた。何が聞こえたのか分からない恵の耳にそっとデュークの手が触れた瞬間、突然彼女の耳の形状が変化した。

「ちょ…これって…」

「猫の耳の性能は、犬以上です。それに、ブランチはそれを遥かに上回ります。これなら聞こえるでしょう」

突然の本物の「猫耳」に驚く彼女だが、それ以上にその性能に驚いていた。静けさの中に埋もれていた声が、はつきりと聞こえるのだ。

「これは…誰かが助けを!？」

「ええ、急ぎましょう!」

すぐにその情報は街中に散らばる二人に伝えられ、その場所に一番近い恵とデュークが動き出した。その方向にあったのは工場を囲む壁。しかし、工場の中からは何も聞こえない。一体どういう事なのか、と戸惑いかけた恵だがその後のデュークの動きを見て納得した。彼女を少し離れた所に移動させた後、キックボクサーの力を一瞬発動、壁…いや、壁がある方向にある次元の壁をぶち抜いた。匂いもこの中から一番漂ってくるようだ。他の分身たちを自分の元に一瞬で融合させた後、急いで中に潜った二人。そして、今回の事件の真相が明らかになるうとしていた。

「あ…あなた…?」

「…やはり僕の世界の人…未来人が…!」

厳しい視線で一人の女性を見つめるデュークと…

「き、君たちは…」

「プレッツェンさん、助けに来ましたよ！」

捕われていた男の名を呼ぶ恵。

「…連絡が来た！犯人が見つかったみたいだ」

探偵局内で留守番をしていたもう一人のデュークや、彼から伝えられたランチにもその情報は伝えられた。確かに外は寒いが、悪党が見つかったとなれば黙って丸まっているわけにはいかない。すぐに合流せんとデュークが準備を始めたその時、探偵局の呼び鈴を鳴らす音が聞こえた。インターホンから見たのは、以前お邪魔したプランサーと、その仲間と思われる人々。皆お揃いの茶色の衣装を着ているが、性別は様々のようだ。そして、もう一人。

「あの…デュークさんと黒猫さんですか？」

「はい、そうです…」

映像に見えるのは、ちょうど局長ほどの年齢に見える女性。後ろの人々と同様、北欧系の顔つきをしている。最初はデュークも突然の訪問に怪しんだものの、その声を聞いた途端突然敵意が薄れてしまった。

「下に降りてきてくれませんか？」

一体何を考えているのだろうか。一瞬不安がよぎったが、その時はその時。自分やランチを身を守る武器は無数に出せるのだ。

しかし、その必要はなかった。探偵局を出た先にいた、深々と頭を下げた女性からは、どう見ても悪の心を感じる事は出来なかった。そして、彼女は名前を名乗った。

「私の名前は、イルマ・サローネン。ヨウルマーと言った方が、貴方も調べやすいかもしれないわね」

まるで自分の能力を言い当てたようなその口調に驚きつつも、彼女の言うとおり脳内でその名に対する情報を検索してみたが、数件あたたただけで十分すぎる情報がデュークにインプットされた。目を見開き、彼女の姿をまじまじと見つめながら。小声でこっそりとうしたのか尋ねるブランチに、驚きと興奮を要り混ぜながら彼は語った。今、彼の眼にはその女性は「お姉さん」にも「おばさん」にも、そして「おばあさん」にも見えている。そして、付き添っている人々も、また別の、人間とは違った姿に。

「ブランチ、この方はミセス・サンタクロース。サンタクロースの奥さんだ」

20・聖夜は再び 後編

一方。

「プレッツェンさんは貴方に誘拐されてたのね！」

西洋風の男性、プランサーに頼まれた探し人の依頼。辿って行くうちに恵とデュークは、時空の隙間に真実を見つけた。今にも泣き出しそうな男、プレッツェンは怒り心頭の女性に首元を抑えられ、身動きが取れなくなっていたのだ。

「それがどうした！」

売り言葉に買い言葉のように返す女だが、恵も負けてはいない。

「私が相手よ！」

そう言った途端、女の背後にもう一つの影が現れ、プレッツェンに構えていた手刀に拳の一撃を加え、隙を一瞬だけ作った。それを見逃さずデュークが指を鳴らすと、人質の姿は消え、彼の元に移動した。余りにも鮮やかなやり方に驚く女は、それが何を意味するのか、指を鳴らした主を見て驚愕の顔と共に気付いた。

「デューク……！」

その時、突然女の体は動きを封じられた。隙だらけの彼女の体は、増殖探偵によって抑えつけられ、身動きが取れなくなってしまった。腕を動かそうにも、二人の恵はそれを固い床に押さえて離さない。諦めて勘弁しろ、というその言葉に、従う外なかった。そして、そ

のままの姿勢で尋問が始まった。

「貴方、どうしてあの人にあんな事を？」

そう言う恵に対し、女は顔をしかめて答えた。

「あれが…人に見えるか？」

「違うの？悪いけど、今の私にはそう見える。匂いは違うみたいだけど…」

「だったら分かるはずだろ！」

そして、次の言葉に恵は信じられないと言う顔を向けた。それもそうだろう、いきなりあの男性 プレッツェン の正体が、サンタクロースのトナカイだと言われたら。しかし、それを肯定したのは名指しされた本人であった。

デュークの元を離れた彼は、次第に光に包まれていく。眩いきらめきに恵が眼を閉じた時に変化が生じたようだ。再び眼を開けた時、そこにいたのは人間ではなく、立派な角を持ち、首に鈴をつけた一頭のトナカイだったのである。

「ほ…本物…」

啞然とする恵たち。しかし、彼女たちを突き離すチャンスはその時にいくらでもあるはずなのに、その女性はその権利を行使する事は無かった。どこか諦めの心が残っていたからかもしれない。

「恵…とか言ったな…。お前も、サンタを信じるのか？」

突然出たその問いに、恵ははっきりと言った。サンタクロースはいらぬと。

「だって、いない証拠なんてどこにもないでしょ？目で見たものだけを信じちゃいけないっていうのが常識だもん。ね、デュー…」

その時、局長は気付いた。自分の傍にいる女性の眼に、涙が溜まり始めていた事に。その表情を見て、何かが吹っ切れたか、何かの糸が切れた涙である事を確信し、そっと自分の分身を解いて彼女を自由にした。一瞬トナカイは驚くも、そのまま女性は泣き崩れた。そして、その涙は次第にうれし涙へと変わり始めた。その理由は、デュークが教えてくれた。自分のいる未来世界では数少ない思想の持ち主であるからだ、と。

「そうか…やっぱりクリスマスもサンタさんもないの？」

「いえ、クリスマス自体はあるのですが、もうそこにサンタはいません」

「え…！」

泣き続ける女性に、トナカイが近寄り、優しく撫でている。あれだけ酷い事をしたのに、彼は許してくれると言っているようだ。ごめんなさい、と言いつつ、そのフカフカの毛皮に抱きつく女性。

「…あのような光景を、大人が消してしまったのです。恵局長が一番嫌う方法で」

「それって…大人がサンタクロースを…」

「今もその傾向は現れているような事が、さらに進行してしまったのです」

クリスマスというイベントを題材にした様々な大企業による商戦、恋人同士の祭りと言う流れに移転しつつある実情。それがやがてある時に一つの限界に達してしまった。クリスマスという言葉があれ

ば十分という流れが生まれ、太った髭の老人は不要品として扱われ始めてしまったのだ。彼に頼って玩具を貰うという考えはもつてのほか、自分の意志で手に入れるべきだ。社会を挙げて、サンタクロース排斥運動が始まってしまった。

肥え太る大人たちによって子供たちが搾取されると言う醜すぎる未来の惨状に、夢を大事に持つ恵局長は言葉が出なかった。

「…恐らく彼女は、ずっとその夢を忘れずに居続けたのでしょ

う」
その言葉に、ずっと泣いてばかりであった女性が動いた。

「デュークの言うとおりだ。さすが犯罪者だ…」

反論しようとした恵だが、それは自ら我慢した。真実を言っているのに怒っては、過去の存在として示しがつかない。悪い大人の見本だ。

「私はずっと信じた。誰にも理解されなくても、ずっと信じていたんだ。」

それなのに…それなのに、サンタは来てくれなかった」

デュークは、彼女の脳内にあるチップにあるデータが埋め込まれている事を既に認知していた。このような時空の隙間に新たな空間を創りだすものだが、このサイズを見る限り、明らかに正当な方法で手に入れる事が出来るものではない。それに、タイムスリップ用のデータも、違法に複製された劣化品である事も見抜いた。他にも空間座標測定や手の構成を変える簡易型プログラムなど、どれも通常では手に入れる事の出来ないものばかりだ。

法を犯すまで、彼女は思いつめていたのだ。そしてこれらを手に入れた時、女性の計画は実行に移された。

「サンタがいなくて皆が言うなら、私がそれを私に証明する…」

そして、サンタのソリに目を付け、牽引用のトナカイの一頭を誘拐した。空間座標でサンタのソリの位置を測定、そこにいたトナカイたちの動きを監視し、仕事を終えた一頭のトナカイが動いた直後に捕らえた、という。それは、トナカイことプレッツェンの口からも同じような言葉が出た事で証明される。しかし、もうそれは実行に移される事は無い。彼女がやって来たこの世界には、サンタを信じ続ける人がまだ大勢居る事が分かったためである。

そこまで深い考えでサンタの事を想うまでになっていた犯人を、恵はとても成敗する気にはなれなかった。しかし、困り顔のトナカイ同様、この事態をどう解決すればいいのか分からなかった。それは、隣にいる助手も同様。彼らの手には、少々大きすぎる問題であるのだ…。

こうなれば、自分が時空改変を使うしかない。そう考え、デュークが局長に助言を求めようとした時。彼の脳内に、もう一人の自分の声が響いた。彼女に会わせたい人がいる、と言うのだ。どういう事だ、と聞き返そうとした時。

「ホウ、ホウ、ホウー！」

どこかで聞いたような笑い声、ただしトーンが高く、少し落ち着いている。その方向を見て、全員の顔は驚きに包まれた。これは決してデュークの時空改変の影響では無い、本当にトナカイのひくソリが空を飛んでいるのだ！7頭の勇ましい足が、空気を鋭く掴んでいる。そりには探偵局にいたはずのもう一人のデュークと黒猫のブランチ。その後ろには、白い大きな袋。そして、ソリの一番前側に座り、巧みにトナカイたちを操っているのは…

「さ…サンタクロース!？」

「違う…あの人は…」

彼女は知っていた。彼女の名前はヨウルマー。サンタクロースの奥さん、そして偉大なる魔女なのだ。

「貴方が恵ちゃんね、素晴らしい助手をお持ちのようで」

初めて触れるヨウルマーの手は、まるで太陽の日差しのように暖かった。優しい眼に、思わず恵にも笑みがこぼれる。彼女の後ろで、二人のデュークとブランチは互いにその経験を並列化…分かりやすく言つと、語り合った。

「じゃあ、プランサーさんも…」

「そうですニヤ!ヨウルマーのおばちゃんに頼まれて、丸斗探偵局に相談に来たんですニヤ!」

「人間の姿に変身できるようになったなんて驚いたよ…。ソリを引っ張る以外にも、サンタのアシスタントをしてるそうなんだ」

「そうか…」

そう言つてトナカイの方を見ると、ひときわ屈強なトナカイが彼に向けてウインクをした。それを受け、恵と共に事態を見守っていた方のデュークも敬礼のポーズで返す。

そんな中で、ヨウルマーはある準備をしていた。白い袋の中から取り出したものが何か、一番分かつていたのは多分恵かもしれない。

「Iena」…レナと書かれている金色のシールを付けた箱を持ち、彼女はプレツェンの傍で恐々と様子を見ていた女性の方へ向けて歩きだした。トナカイの影に隠れようとした女性に、ヨウルマーはこう言つて箱を渡した。

「メリー・クリスマス、レナちゃん」

レナ。見ず知らずの自分の名前をも、ヨウルマーは既に把握していた。間違いない、本物のミセス・サンタだ。しかし、あれだけ悪い事やって来た自分には、プレゼントを貰う価値なんてない。そう言おうとしたレナを、ヨウルマーは優しく抱きしめた。

「ごめんね、ずっと貴方の元に行けなくて。本当にごめんなさい…」

「え…でも私…」

「ううん、貴方は良い子よ。ずっと私たちの事を信じてくれてきたんだもの」

サンタの袋は、恵たちが知っているものよりもポロポロで小さかった。「生意気な子供」が多くなりすぎた未来においては、それに入る量しかサンタクロースは存在できないのだ。しかし、そんな厳しい状態でも夢を信じ続けている人がいる。それだけでも、ヨウルマーは嬉しいのだ。

そして、もう一度レナはプレッツェンにあのような酷い事をした事を謝った。彼も彼女を許してくれた事は言うまでもない。

「ねえ、レナはプレゼントに何を欲しがってたの？」

「「きよ、局長…」」

「え、今開けちゃって…」

押しの強さが戻って来た恵に戸惑うレナだったが、ヨウルマーの笑顔が彼女を後押しした。トナカイたちやブランチも見守る中、包み紙を丁寧に取り、箱を開けた。その中に入っていたのは…

「これ…スニーカー!？」

レナの顔が、次第に明るく元気な色になり始めた。元々は活発な少女であった彼女が欲しかったものは、どんな硬い道でも素早く、まるで飛ぶように走る事が出来る高級品のスニーカーだったのである。デューク曰く、余りにも便利、合理的になり過ぎた未来においては現代の様々な技術が憧れとなっている事も多いと言う。ただ、ちょっとだけレナの顔が困惑の色を見せた。自分が欲しかった物に比べて、少々値段が安く、そして二番目や三番目辺りに狙っていた品物だった。その理由は、ヨウルマーが良く知っていた。

「私たちが信じてくれたのは嬉しいけど、悪い事は駄目。これはその分のマイナスよ」

しかし、今回のマイナスは彼女の思いを打ち消すまでには至らなかったようだ。

「ねえ、デューク」

恵は一つ、彼に聞きたい事があった。

「えーと、ヤンマーさんだっけ？」

「ヨウルマーさんですよ、局長……」

「ああそれぞれ、なんで大晦日に私たちの所に来たの？」

どこかの慌て者のサンタはクリスマス前にうつかりやって来てしまったらしいが、今回はどう見ても慌て者ではない。しかし、それでも今回は大晦日になってしまう理由があったらしい。

「吹雪が…？」

「ルドルフのお鼻の灯りも消えちゃうほどの吹雪が吹いちゃって…」
久しぶりに戻って来たプレッツェンと触れ合うトナカイの中で、ひとときわ輝く赤い鼻を持つのが先導係のルドルフである。どんな吹雪でも前方を照らしてくれるのだが、彼女曰く最近の地球環境の変化はそれすら見えなくしているらしい。

「ニヤるほど、どおりで俺のところにはサンタさんが来なかったわけだニヤ」

ここに来て突然良い子ぶる彼だが、当然遅い訳で。ヨウルマーがプレゼントを持って来たのは、なんと恵の方であった。驚く彼女だが、この事件を鮮やかに解決してくれた報酬だ、という彼女の言葉に、喜んで頂く事にした。

「え、中身開けるの!？」

「当たり前だろ、私のも見たじゃないか」

反論しようとしたが、不公平だと文句を言われると開けざるを得ない。レナと同じように中身を覗くと、そこに入っていたのが何か、と続く所だが、その中身は読者の方に想像して頂きたい。とにかく恵が非常に喜び、ブランチが悔しがり、その様子を見たレナに明るい心が完全に戻るといったものだったのは確かだ。

…そんな中で、ヨウルマーは二人のデュークを呼んだ。話したい事があると言っただ。

「…ごめんなさい」

「謝らなくていいのよ。貴方達は悪くないわ」

「でも…未来世界で貴方がたの進路を妨害しているのは」「間違いなく僕の…」

「昔の話は昔の話、今は今。貴方は必死に罪を償おうとしてるんでしょ？」

「はい…」

「心配しないで。いくら吹雪を起こしても、サンタもトナカイもみんなへっちゃらだから」

「…すいませんでした…」

「でも、まだ許すわけにはいかないわ。

私に嘘をつかせちゃうくらいなんだから、まだまだプレゼントを貰えるには早いわね」

「それは、承知の上です」「これだけは、申し訳ないですが…」

「そうね…誰かの心を暗くする事なんて、私も大嫌い。悪い嘘もあるけど、明るい嘘もあるのよ。大丈夫、恵ちゃんの秘密は絶対誰にも言わないわ。勿論、デューク君もね」

「世界中の子供たちの名前が書いてある今年のリストに」「局長の名前が入っている事の意味、です…」

「それが、貴方の罪の償いかもしれないわ。色んな世界で悪い事をやってきた分、恵ちゃんをしっかり支えて、皆の笑顔を守る」

「…そうですね…分かりました」

「うん、よろしい！」

これで、今年のクリスマスプレゼントは、全部終了ね」

「あ、あの…」「最後に質問を一つだけしても…」

「どうしたの、二人とも？」

「…サンタクロースって、どんな方ですか？」

「貴方達には絶対気付かれない、でも皆の事を決して忘れない。
そんな優しくしてお茶目な、素敵な人よ」

こうして、丸斗探偵局今年最後の業務は終わった。

サンタのソリに乗せてもらい、丸斗探偵局一行とレナは異世界を抜け出した。そして、その後4人：いや、デュークはまだ二人の状態を維持しているので5人は、空に向かって消えて行く不思議なソリと、それを引つ張るトナカイたち、そして彼らに軌跡を見せてくれた不思議な女性ヨウルマーを手を振って見送った。

「さ、この足でちよっくら除夜の鐘を聞きに行きますか!」

「除夜の…鐘?」

「え、未来ってそれもないの!?!」

淡々と進む未来においては、様々な伝統すら消えかけているらしい。このまま未来へ帰って自首しようとしたレナに恵は待ったをかけた。

「どうせこのまま未来に帰ってもつまらないでしょ? だったら、私たちといい事しない?」

「え…」

「局長、いいんですか?」 「また僕たち、サンタさんに会いにくくなりますよ」

「いいのよ、少しくらいは! ね、今年と来年の跨ぎ、一緒に体験してみよう!」

「俺も賛成ですニャ!」

人間万事塞翁が馬、という。災い転じて福となす、ともいう。人生、

何が起るかわからないというものだ。レナはそれを改めて心に感じ、恵の手を引っ張り、天高く飛ぶスニーカーで今年最後を迎える道走りだした。

「あの…そろそろ一人に戻っても…」

「だーめ。たまにはいいでしょ、私みたいに分身出来る気分、結構楽しいでしょ？」

二人…いや三人。大晦日の夜、除夜の鐘を聞きに行く一行の後ろから、局長と二人になった助手はにぎやかに歩いていた。そんな中、恵は気になる事があった。

「ところでさ、ちよつと聞きたいんだけど…結局あの人、何者だったの？」

サンタさんの奥さんだと言うのは恵もこの事例以前に聞いたことがある。しかし、彼女の名前もレナの名前も、皆知ってたんでしょ？ デューク曰く、ソリに乗せてもらったランチやデューク的能力すら言い当てたという。間違いなくただの人ではない。彼女は一体何者だろうか。その問いに、二人の助手は恵の両耳それぞれに向けて言った。

「僕の手を持ってしても、絶対に切り出す事の出来ない立派な大木、ですね」「

「へ…？」

デューク自身も完全な詳細を聞き出すことはできなかったが、ヨウルマーさんやその旦那さんは、僕以上の時空改変能力の持ち主なのだろうと彼は考えている。

「ちよつと今いるこの時代でも、サンタクローズの時間の感じ方は、

普段の僕たちとは完全に違っているという報告もなされているそうですね」

「…確かに私も聞いたことあるな…」

それを証明するかの如く、かつてデュークが悪党であった頃にどんなにプレゼントを届ける任務に支障を与えても、次の日には子供たちの元にプレゼントが届けられていました。地割れや吹雪、時にはプレゼントそのものを消し去る。どんな手段を使っても全く意味をなさなかった。

「打つ手なし、って奴ね…。ま、あの頃のデュークはまさかこんな形で和解が出来るなんて思ってたでしようね」

「…でしようね」

そしてもう一つ。彼がヨウルマーを越える事は出来ないと考えた理由は彼女の志にあった。彼女の生まれは世界でも有能な魔女の家系しかし、そんな有能な血を持つにもかかわらず、彼女はあまりそれを多用しない。

「その理由、局長はご存知ですか？」

「…どうして？」

「魔法が何でも出来すぎるから、だそうです」

魔法と言うものは、今いる科学を遙かにしのぐ力を持つ。それゆえ、ほぼ何でもできる万能の武器にもなる。しかし、それはすなわちそこに至るまでの過程そのものを否定してしまうと言う事になる。なにか一つの物を作り上げるまでどんな道筋をたどっていけばいいかそれを把握することは、より高度なものを作る時に重要な要素となる。

「なるほど、何が言いたいか分かってきた。デュークの考えって、ヨウルマーさんと同じね」

「そう言う事です」「よき先輩の話聞く事が出来ました」

そして、最後にもう一つ。

「それは、恵局長が一番知ってますよ」「大人はむやみに子供の夢に介入してはいけない、ですよね」

「…さすが、我が自慢の助手」

「「ありがとうございます、局長」「」

「二人ともー、もう少しで除夜の鐘鳴りますニヤー！…ってひい
い…」

「うわ…遠くからでも結構響く…これが鐘の音か…」

耳を押さえながらも、いよいよ今年の終わりを告げる鐘の音色が聞こえ始めた事に興奮する二人。それを追いかけて、三人も足を早め始めた。

「ちょっと待ってー！…それじゃ、デューク。メリークリスマス」

「アード」

「ハッピーニューイヤー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0202z/>

増殖探偵・丸斗恵

2011年12月31日01時49分発行